

平城京左京九条三坊五・六坪

発掘調査概要報告





九条大路

東三坊坊間西小路

坪内通路

宅地11

宅地10

宅地9

宅地3

井戸

井戸

井戸

宅地2

井戸

宅地1

九条条間南小路

井戸

五坪

六坪

東三坊坊間路

表紙 第2区全景 (北東から)

Ⅲ-1期の遺構・宅地境を表示、白い四角部分が掘立柱建物

例言

- 1 本書は、奈良市教育委員会が奈良市西九条町四丁目1番地の11、他2筆で実施した、研修センター建築に係る発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は、平成30年7月23日から令和元年5月17日に実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、大和ハウス工業株式会社と国際文化財株式会社のご理解とご協力をいただいた。明記し感謝申し上げます。
- 4 発掘調査及び本書の作成は奈良市教育委員会 教育部 文化財課 埋蔵文化財調査センターが担当した。
現地調査は、奈良市教育委員会 中島和彦 吉田朋史 桑原一徳、国際文化財株式会社 安村 健が、本書の編集・執筆は中島和彦が担当した。
- 5 発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数で、本発掘調査は平城京跡第727次調査（HJ第727次調査）である。
- 6 本書で使用した遺構番号は、本調査に付した仮番号である。遺構の種別を示す以下の記号と番号を組み合わせで表記している。
SA（柱列・塀）、SB（建物）、SD（溝・溝状遺構）、SE（井戸）、SF（道路）、SK（土坑）、SX（その他）
また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。
- 7 本書では、遺構等の位置を平面直角座標系第IV系（世界測地系）の数値で示した。
- 8 調査に関する記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

例言・目次	1	4 五坪の調査	8
I 調査経過	2	5 六坪の調査	17
II 調査成果		6 古墳時代の遺構	23
1 周辺の調査	3	7 出土遺物	24
2 基本層序	4	III まとめ	30
3 条坊遺構	5	別表・図版	31



図1 調査地全景（北東から）

I 調査経過

調査地が位置する西九条町四丁目1番地11他は、大和ハウス工業株式会社の事務所・工場・研修棟等が建つ広大な敷地内にある。平成元年度には、今回の発掘調査箇所での研修棟建築が計画され、当市教育委員会が試掘調査¹⁾を実施した。調査の結果、奈良時代の遺構面が残存することが判明し、建物は遺跡に影響がないように設計され竣工している。

平成25年以降これら建物の順次建て替え工事に伴い、埋蔵文化財発掘届出書が提出された。いずれも基礎掘削による遺跡への影響が少ないことから、当市教育委員会が工事立会調査を実施している。

調査地は研修センター建築予定地で、平成30年1月25日付けで埋蔵文化財発掘届出書が提出された。建物の規模・基礎構造上からみて遺跡への影響が避けられないことから、協議の結果、建物部分を対象とした発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は、大和ハウス工業株式会社の委任を受けた国際文化財株式会社と当市教育委員会との間で契約を締結し実施した。

発掘調査は平成30年7月から国際文化財株式会社による準備工が開始され、23日から当市調査員が現地調査を開始、令和元年5月17日に調査を終了した。

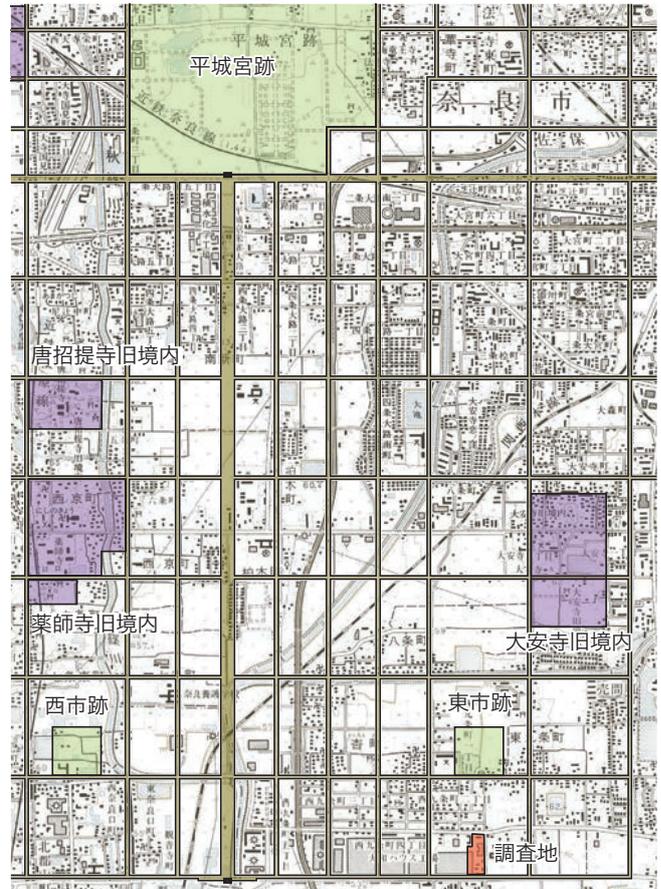


図2 調査地位置図 (1/40,000)

年	月	作業内容	備考
平成30年	7月	準備工 23. 包含層掘削・遺構検出開始	
	8月		11~16. 休み
	9月		4. 台風接近 30. 台風接近
	10月	19. 空中写真撮影 30. 補足調査開始	25. 記者発表 28. 現地説明会 (第1回)
平成31年	11月	第3区 23. 包含層掘削・遺構検出開始	
	12月	26. 補足調査終了	29~6. 休み
	1月	第2区 25. 空中写真撮影	31. 記者発表
	2月	B区 C区 22.6 26.6 D区 14. 補足調査終了	3. 現地説明会 (第2回)
	3月	第1区 7. 包含層掘削・遺構検出開始	25. 樋口会長現場来訪
令和元年	4月	5. 空中写真撮影 8. 補足調査開始 18. 補足調査終了 26. 埋め戻し完了	
	5月	19. 井戸枠記録作業・片付け 17. 撤収	



発掘調査は調査区を北から第1～3区の3箇所に分け、工事スケジュールの関係から第2区→第3区→第1区の順番で実施した。また建築予定建物の形状変更による発掘区の形状変更、条坊遺構の確認のために小規模な発掘区（B～D区）を設け、発掘調査面積は8,273㎡となった。（現地調査の推移は表参照）

また発掘調査期間中に2回の記者発表・現地説明会を実施し、発掘調査成果の一般公開を行った。現地説明会参加者は第1回200名、第2回230名である。

現地調査終了後、出土遺物の洗浄・注記・接合・図化・台帳作製等の整理作業を国際文化財株式会社が実施し、令和元年12月に完了して奈良市埋蔵文化財調査センターに納品された。

II 調査成果

1 周辺の調査

調査地は平城京の南端の左京九条三坊五・六坪東半部分を占める。調査地内には九条条間南小路が想定され、南には九条大路、東側には東三坊坊間路、北側には九条条間路が隣接する。

調査地北東の十坪の発掘調査(国第166次調査)²⁾では、1/32町規模の宅地が見つかり、平城京内の小規模宅地の様相が明らかになっている。南北に貫流する東堀河によって東西に2分された十坪の東側をさらに東西2分し、これを南北方向に8分割して1/32町規模の宅地を作り出している。宅地内には桁行3間、梁行2間の掘立柱建物と数棟の付属屋があり、当時の最小の居住単位がうかがえる。

また十坪の南側の九条条間路と東堀河との交差点部分の発掘調査(国第141-23次調査)³⁾では、東堀河に掛かる橋脚が見つかり、東堀河からは多量の土馬・人面墨書土器などの祭祀遺物が出土している。

六坪西側の三坪の調査(国第148次調査)⁴⁾では、三坪中央に桁行5間、梁行2間、南北廂付の中規模の掘立柱建物が見つかり、1町利用の宅地が想定される。また古墳時代の掘立柱建物・土坑などの遺構も検出されている。

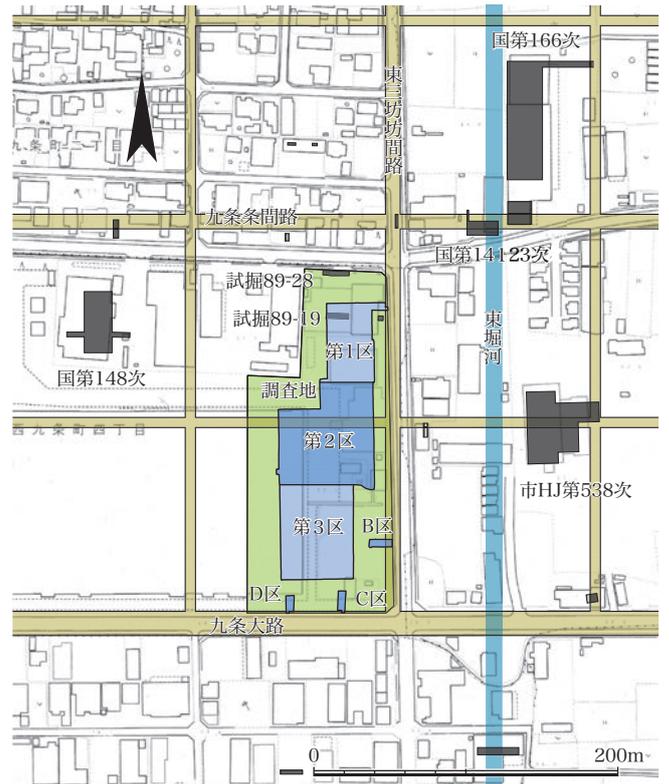


図3 発掘区位置図(1/5,000)

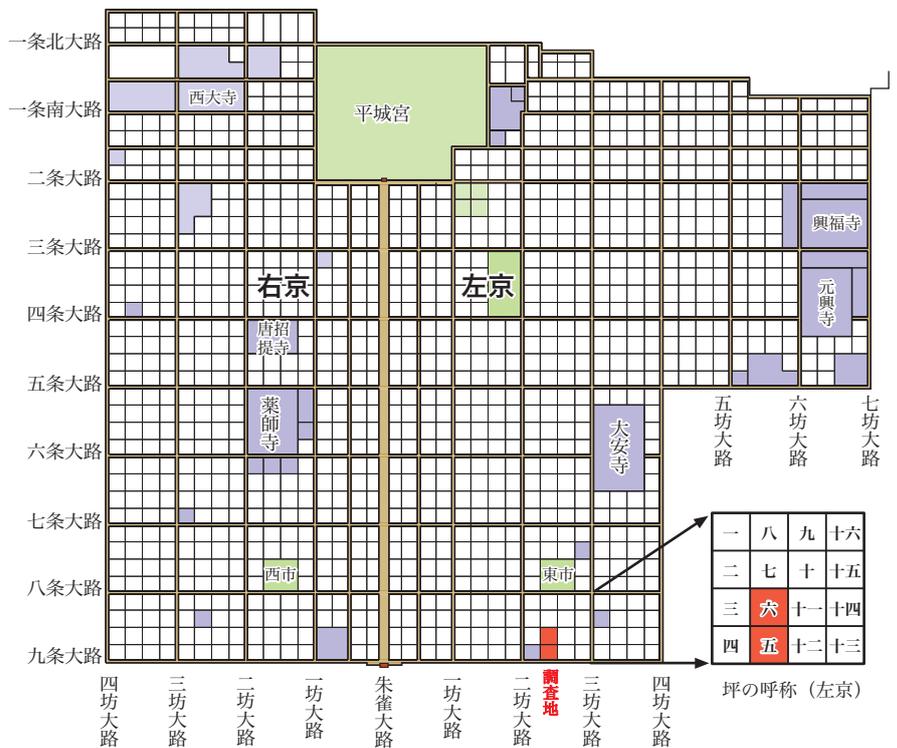


図4 平城京の条坊と発掘調査地

II-1 周辺の調査・II-2 基本層序

調査地東側の発掘調査（市 HJ 第 538 次調査）⁵⁾では、九条条間南小路・東三坊坊間東小路の条坊遺構と南側の十二坪の宅地内の一端が明らかになっている。九条条間南小路は、平城京内での条坊遺構の確認としては最南端のもので、位置が未確定の九条大路の復元において重要な調査成果となる。また十二坪内で見つかる掘立柱建物は小規模なもので、九条付近には小規模宅地が分布する従来からの見解を裏付けている。

平成 17～19 年には、九条大路南側の下三橋町の発掘調査で奈良時代の条坊遺構と建物跡が確認された。⁶⁾従来南京極と考えられていた九条大路以南で 1 坊分の条坊遺構が見つかり、「十条大路」の存在が確認された。遺跡の評価については賛否あるが、平城京九条大路の南に存在する遺跡として、「平城京南方遺跡」と遺跡登録され今後の調査の進展が待たれる地域である。

また四坪は、文献から服寺^{はとり}と推定されているが、考古学的知見は得られておらず詳細は不明である。⁷⁾



図5 市 HJ 第 538 次調査地全景
(東から、中央奥の白い建物部分周辺が今回の調査地)

2 基本層序

調査地の基本的層序は、上から現代の造成土（厚さ 0.5～1.2m）、耕作土と床土（厚さ 0.2～0.3m）で、現地表下 0.9～1.5m で奈良時代の遺構面となる。発掘区中央部分には、奈良時代の遺物包含層（厚さ約 0.2m）が遺構面上に部分的に堆積する。奈良時代の遺構面は、北東部分が最も高く標高約 55.4m で、南に向かい下降し調査地南端では標高約 54.5m となり、約 0.9m の比高

差がある。

遺構面を形成する土壌は、黄灰色砂・黄灰色粘質土・灰色粘土等の水性堆積土から成り、複雑に重複した時期不明の数条の河川が遺構面下に存在する。古墳時代前期の溝が奈良時代と同じ遺構面上にあり、それ以前の堆積であることがわかる。

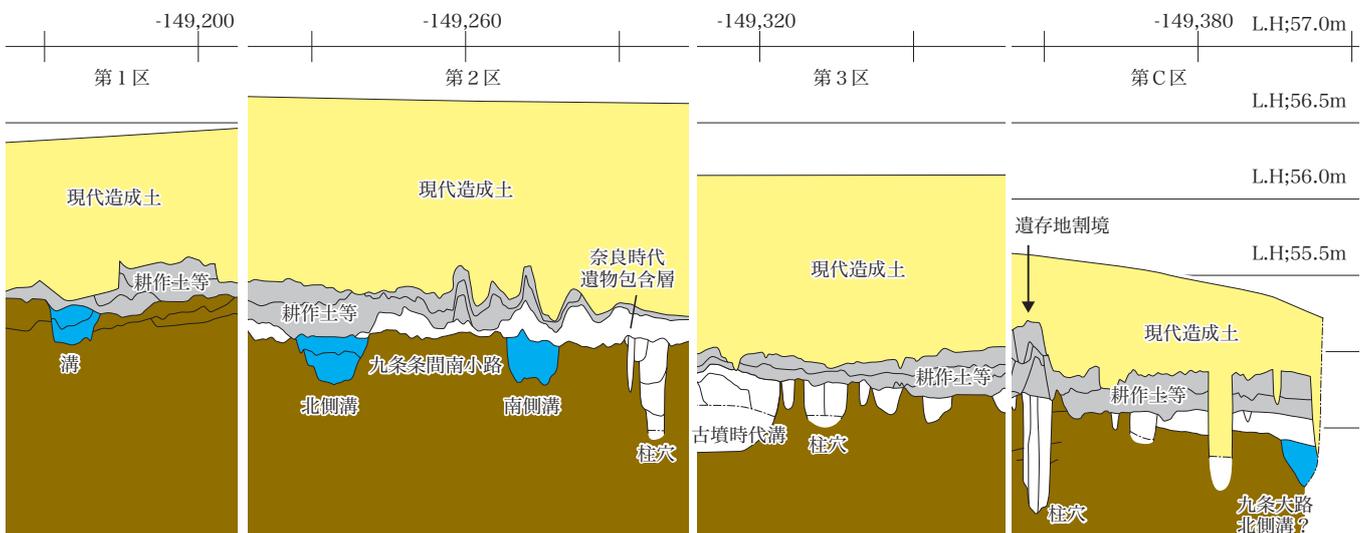


図6 発掘区東壁土層図（縦 1/50・横 1/250）

3 条坊遺構

今回の調査では、九条条間南小路の南北両側溝を確認し、その位置と幅員が判明した。また東三坊坊間路の西側溝、九条大路北側溝の一部を確認し、平城京の条坊復原のための貴重な成果が得られた。各遺構の概要を記し、国土座標値は一覧表にまとめた。

九条条間南小路 SF2001

第2区中央を東西方向に走り、北側溝 SD2002 と南側溝 SD2003 を検出し、溝心々間距離で幅約 6.7m あることが確認できた。路面は幅約 5.0m で、路面上は土のままで舗装等は確認していない。南北両側溝は幅約 1.7m、深さ約 0.4m で、いずれも宅地側の肩はしつか



図7 九条条間南小路 SF2001 全景 (東から)

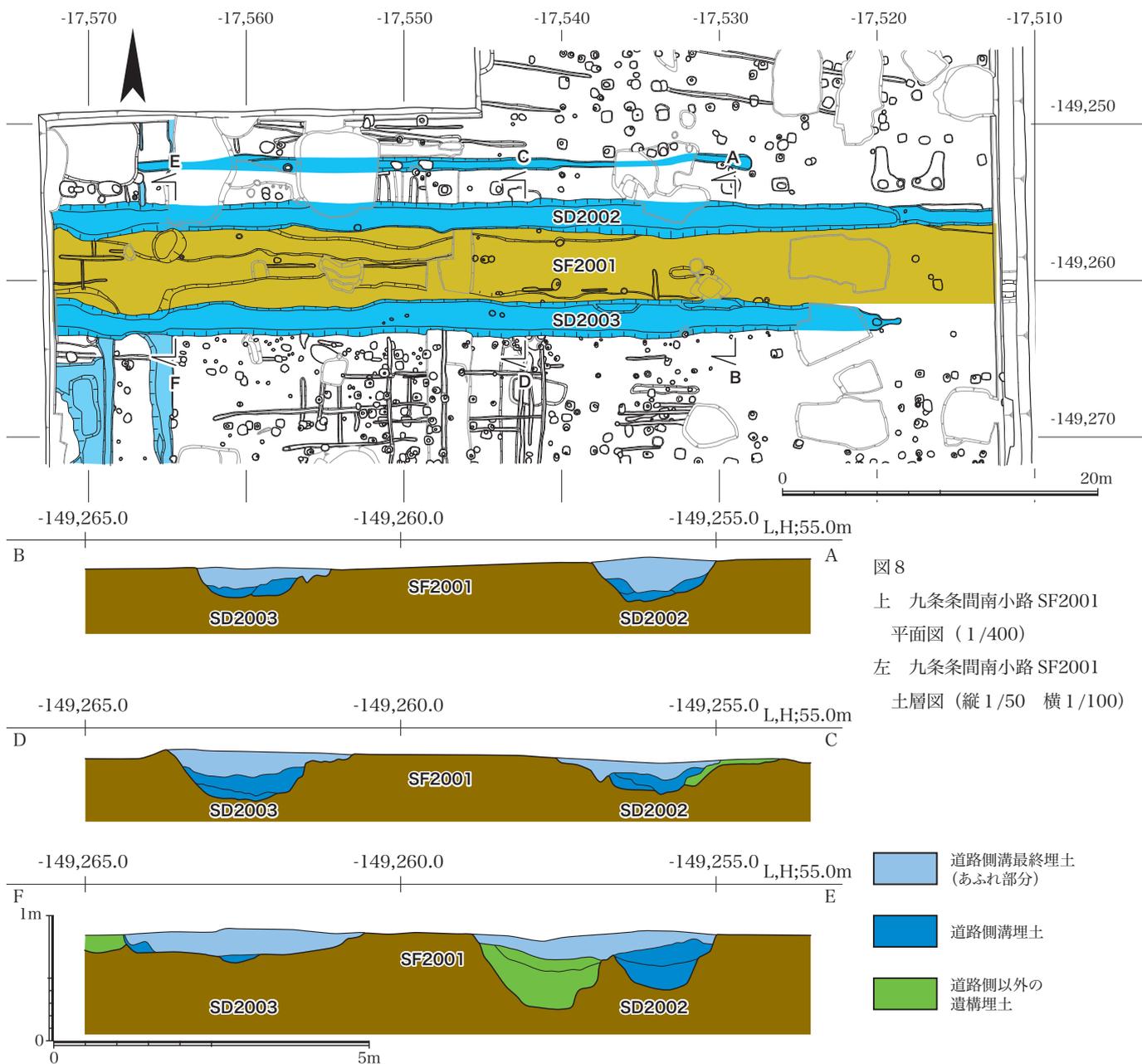


図8
上 九条条間南小路 SF2001 平面図 (1/400)
左 九条条間南小路 SF2001 土層図 (縦 1/50 横 1/100)

II-3 条坊遺構



図9 C区全景(北から)



図10 D区全景(北から)

りしているが、道路側は大きくあふれ路面を侵食している。溝の埋土は灰褐色系の砂質土で、土馬や人面墨書土器等を含め土器が多数出土した。

九条大路北側溝 SD3002

C・D区南端で溝の北肩を検出したのみで、調査地南側に続き幅は1.0m以上、深さ0.3m以上である。褐色砂質土で埋まり、奈良時代の土器が少量出土した。後述する条坊復原の検討から、九条大路北側溝と推定する。

東三坊坊間路 SF1001

第1区とB区で西側溝SD1002を検出した。東側溝は発掘区外で、道路幅は不明。路面上に舗装等は確認できない。西側溝SD1002はB区で幅2.0m、深さ約0.35mあり、道路側はあふれで路面を侵食している。溝の埋土は黄灰色砂質土等で、奈良時代の土器が少量出土した。

五坪の復原と九条大路

今回検出した条坊遺構をもとに五坪の位置を復原する。五坪の北端は九条条間南小路であり、これは発掘調査成果から明らかである。九条条間南小路は東側のHJ



図11 C区 九条大路北側溝SD3002(北東から)

表2 条坊関連遺構の座標値

遺構	遺構番号	X座標	Y座標	備考
九条条間南小路	SF2001	-149,259.24	-17,559.00	路面幅約5.0m
九条条間南小路 北側溝	SD2002	-149,262.58	-17,559.00	
九条条間南小路 南側溝	SD2003	-149,255.90	-17,559.00	
九条大路 北側溝 北肩	SD3002	-149,382.80	-17,567.00	溝幅1.0m以上
東三坊坊間路	SF1001			道路幅推定9.68m
東三坊坊間路 西側溝	SD1002	-149,337.00	-17,502.34	



図12 B区全景（南西から）

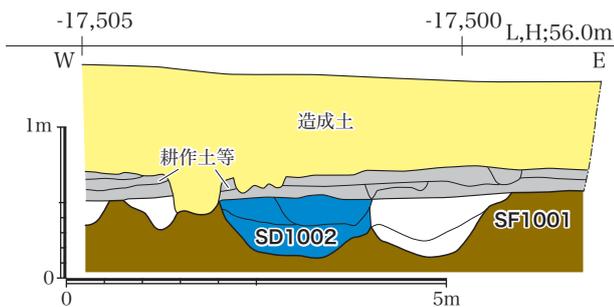


図13 東三坊坊間路西側溝 SD1002 土層図
（縦1/50 横1/100）

第538次調査成果と比較すると、条坊の振れ $0^{\circ}15'20''$ を考慮してもほぼ東西一直線に揃うことから、条坊施工は正確に行なわれていることがわかる。そこで、調査地内の九条条間南小路心 $X=-149,259.24$ からそのまま1坪分の375大尺（約133.2m）分南側の地点に九条大路心があると想定すると、その値はおおよそ $X=-149,392.44$ となる。九条大路北側溝と考えたSD3002の北肩の座標 $X=-149,382.8$ との距離は、9.64mとなり、これを2倍した値19.28mが九条大路の最大幅と推定できる。近年の発掘調査成果から平城京内の大路の幅は16m余りと判明しており、九条大路の幅としてはおおよそ妥当なものと考えられよう。

東三坊坊間路は、東側のHJ第538次調査で1坪東の東三坊坊間東小路心が判明しており、その調査成果から道路心はおおよそ $Y=-17,497.50$ となる。東三坊坊間路西側溝SD1002溝心の座標 $Y=-17,502.34$ との距離は4.84mで、この2倍の値9.68mが道路幅となる。

西側の東三坊坊間西小路は周辺に調査例がなく、東三

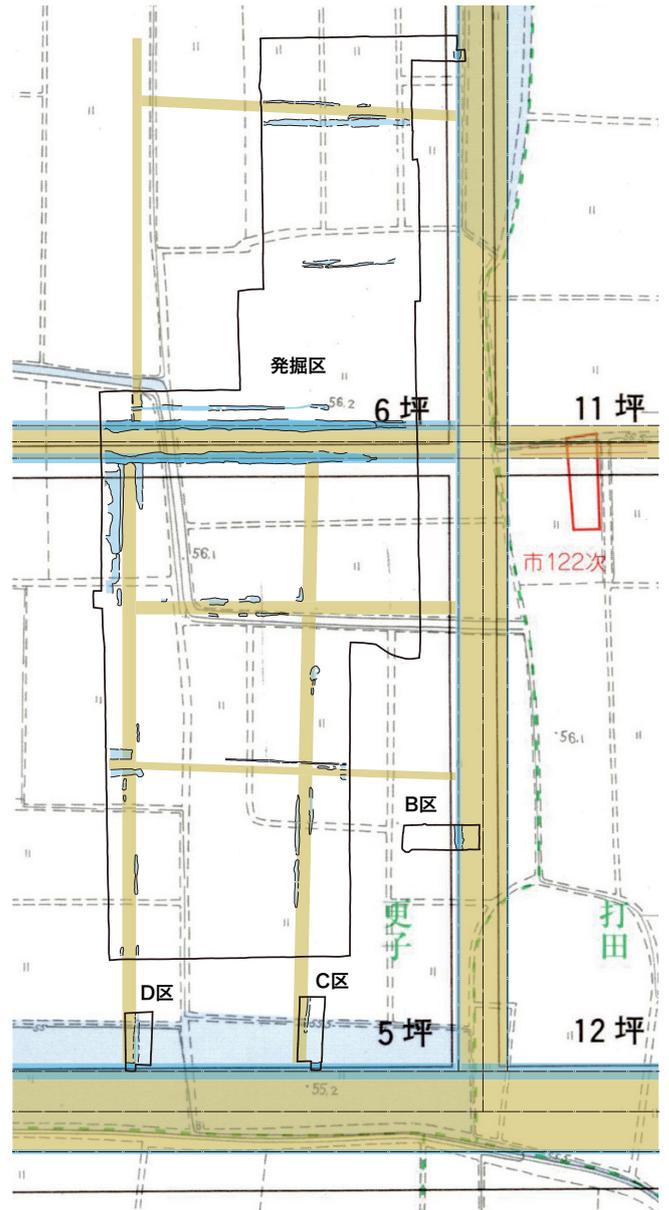


図14 発掘区と遺存地割との関係（1/1,500）
水色トーン部分が推定九条大路遺存地割（文献8より）

坊坊間路を単純に1坪分西側に移動し復原する。

さらに、九条大路にとその遺存地割との関係を記す。調査地南側には、従来九条大路の痕跡として考えられてきた東西に細長い遺存地割があり、発掘区との位置関係を当てはめると、今回検出の九条大路想定位置と対応しないことが判明する。C区の土層断面観察によると、発掘区中ほどで耕作土の段が確認でき、この部分が遺存地割の耕地境界部分とされる。この位置には区画を示す遺構はなく、ここ以南にも柱穴が存在していることから、九条大路上でないことは明らかである。遺存地割については、九条大路廃絶後のものとの関係で考た方が良いのではないだろうか。

4 五坪の調査

五坪では東半部を調査し、奈良～平安時代の掘立柱建物 63 棟、掘立柱列 4 条、井戸 17 基、溝 27 条他を検出した。発掘区内には建物としてまとまらない柱穴も多く、既存建物の基礎や地中構造物の抜き取りにり失われた遺構も考慮すると、建物数はさらに増えると思われる。

遺構の重複関係からは、大きく 3 時期の遺構変遷が追える。また坪内通路によって坪内を分割しており、さらに建物・井戸の分布から 1/16 町・1/32 町規模の小規模宅地の存在が明らかになった。特に五坪中央部の南北に列ぶ 1/16 町・1/32 町規模宅地については全域を調査し、小規模宅地内の建物配置が判明した点は大きな成果となる。

五坪の南北と東端では条坊遺構を確認しており、宅地の四囲の位置がほぼ確認できた。五坪の南北間の距離は道路側溝の肩間で約 119m あり、後述のようにこの値を基準に宅地を分割する。また条坊道路との境には、掘立柱塀が部分的にあるのみで、築地塀等の閉塞施設は確認できていない。C 区では九条大路北側溝に沿って並ぶ

2つの柱穴を確認したが、大路に開く門とも考え難く、西側の D 区では続きが見つからないがここでは塀と考える。

坪内通路は 2 条の並行する溝に挟まれた空間で、幅は 1.4～2.5m あり、路面上は土のままである。坪内を 1/2 または 1/4 分割する位置にあり、時期によっては設置しない場合もある。

以下各時期ごとに概要を記述し、建物・井戸の規模等の詳細は一覧表にまとめた。

掘立柱建物

Ⅰ期

坪内通路によって、五坪内を 1/16 町規模宅地に分割する時期である。ただし、五坪東西中央ラインと南北 1/4 ラインの南側にあたる地点では坪内通路が確認できない。1/16 町規模の宅地はおおよそ東西 31.5m、南北 29.8m、面積 938.7㎡で、1 宅地は 3～4 棟の中小規模の掘立柱建物と井戸 1 基で構成される。建物の方角は概ね真北方向である。発掘区内に存在する 12 区画の宅地の内、宅地 5～7 の 3 区画が全域、宅地 1 の約半分が調査で明らかになった。



図 15 第 2 区全景 (西から)

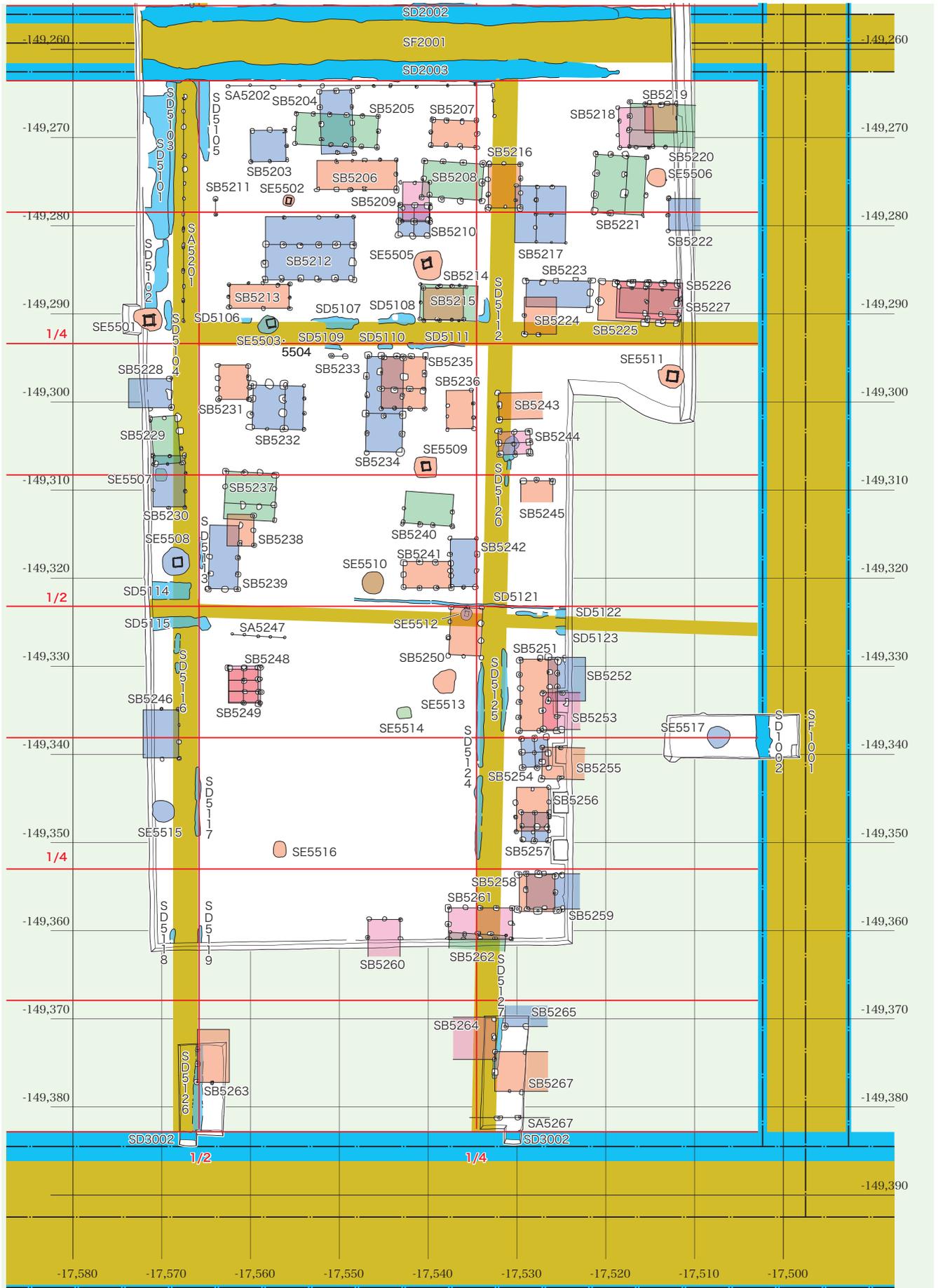


図 16 五坪遺構配置図 (1/600)

宅地1 小規模建物を3棟確認しており、中央西端にある桁行4間の西面廂付南北棟建物SB5217が、最も面積が大きく中心建物であろうか。

宅地3 南西部隅に梁行2間、桁行2間の倉庫と考えられる総柱建物SB5254・5257が、南北に2棟並ぶ点が特徴である。中央東端には井戸SE5517がある。

宅地5 南北と東側を条坊道路と坪内通路で囲われ、西側を溝SD5101と掘立柱塀SA5201で区画する。中央部南寄りにある桁行5間の北面廂付東西棟建物SB5212を中心建物とし、北側に桁行2間と桁行4間の小規模建物2棟(SB5203・5204)を、東側に倉庫と考えられる総柱建物SB5210を、宅地南西隅に井戸SE5503を配す。

宅地6 南北と東側を坪内通路で囲われるが、西側には区画を示す遺構が確認できない。井戸SE5508を隣の宅地のものと考え、その東のSB5239との間に宅地境界があったと推定する。宅地中央の北端に門と考えられる柱列SB5233がある。宅地内には小規模建物が4棟あり、宅地中央をはさみ東西対称位置に配される。井戸SE5512は宅地東南隅にある。

宅地7 当該期の遺構は確認できず、その後も比較的遺構密度は低い。理由は不明であるが、宅地利用に不都合でもあったのか。

宅地10・11 東端の一部を調査したのみであるが、各々宅地南東隅に井戸SE5508と5515が配置される点の特徴である。

この他の宅地については、発掘区内に遺構が見つからないか部分的な確認に止まり、詳細は不明である。

II期

新たに五坪中央に南北方向の坪内通路が設置され、坪内を東西二分する。坪南北1/2ライン上に東西方向の細い溝があるのみで、南北の区画を示す明瞭な区画施設はない。しかし、井戸SE5504・5510・5513が1/16分割した推定宅地内の範囲に1つずつ分布すること、五坪北端の掘立柱塀SA5202の東端が坪の東西1/4ライン近くで南へ折れ曲がることから、1/16町規模の宅地が復原できる。ただし南端の宅地7は、東西1/4ライン上に建物SB5262があり、1/8町規模宅地とも考えられる。

進入路の関係上、坪中央の宅地5・6は入口を坪内通路に面せざるをえず、宅地1～3の入口も隣接する条坊道路からと限定される。坪内を縦横に走る坪内通路のどこにでも入口を設定できるI期と比べ、大きく異なる点である。I期同様、宅地4～6は全域が判明した。

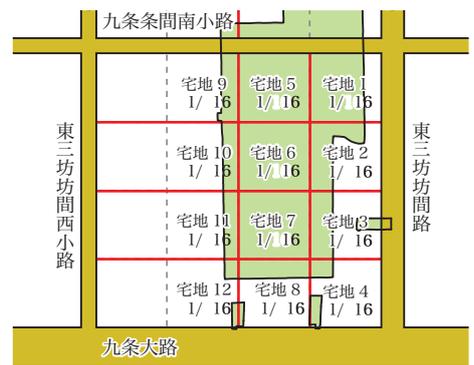
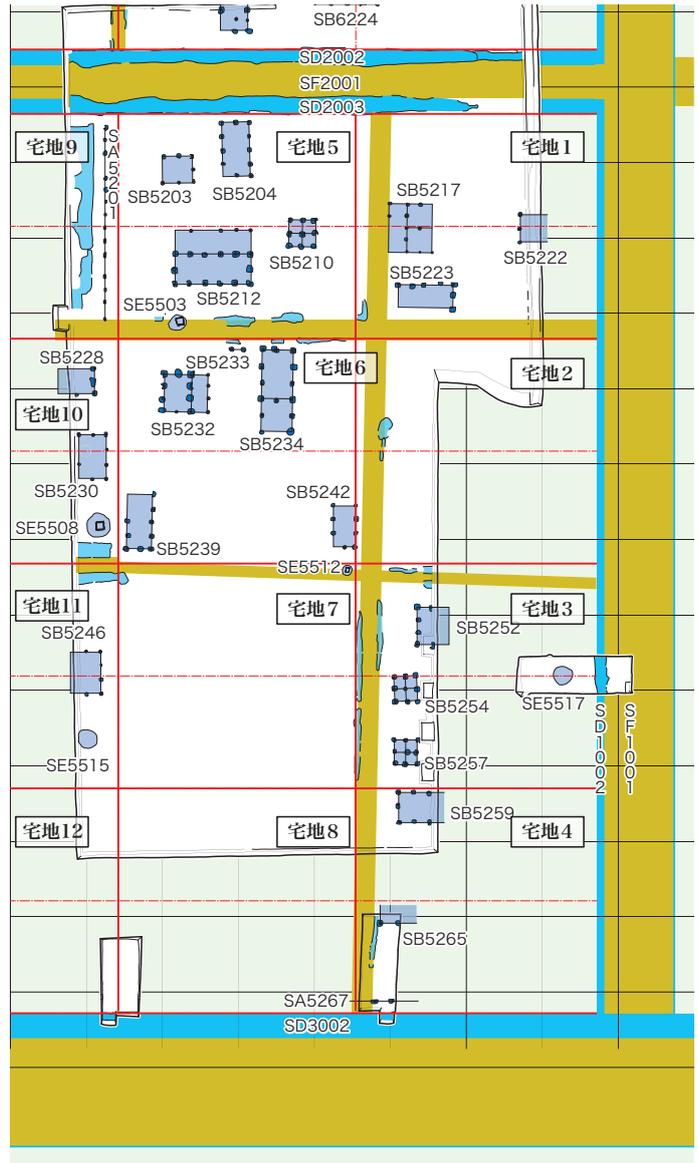


図17 I期遺構配置図

五坪内を坪内通路等で東西南北四等分して16区画を作り、それぞれ1/16町規模宅地として利用する。坪中央の南北方向の通路は設置されていない。宅地内は、桁行3～5間の中心となる建物とやや小規模な付属建物や総柱建物など数棟で構成される。井戸は各宅地の隅に寄せて築かれる傾向がある。

(8世紀中頃～後半)

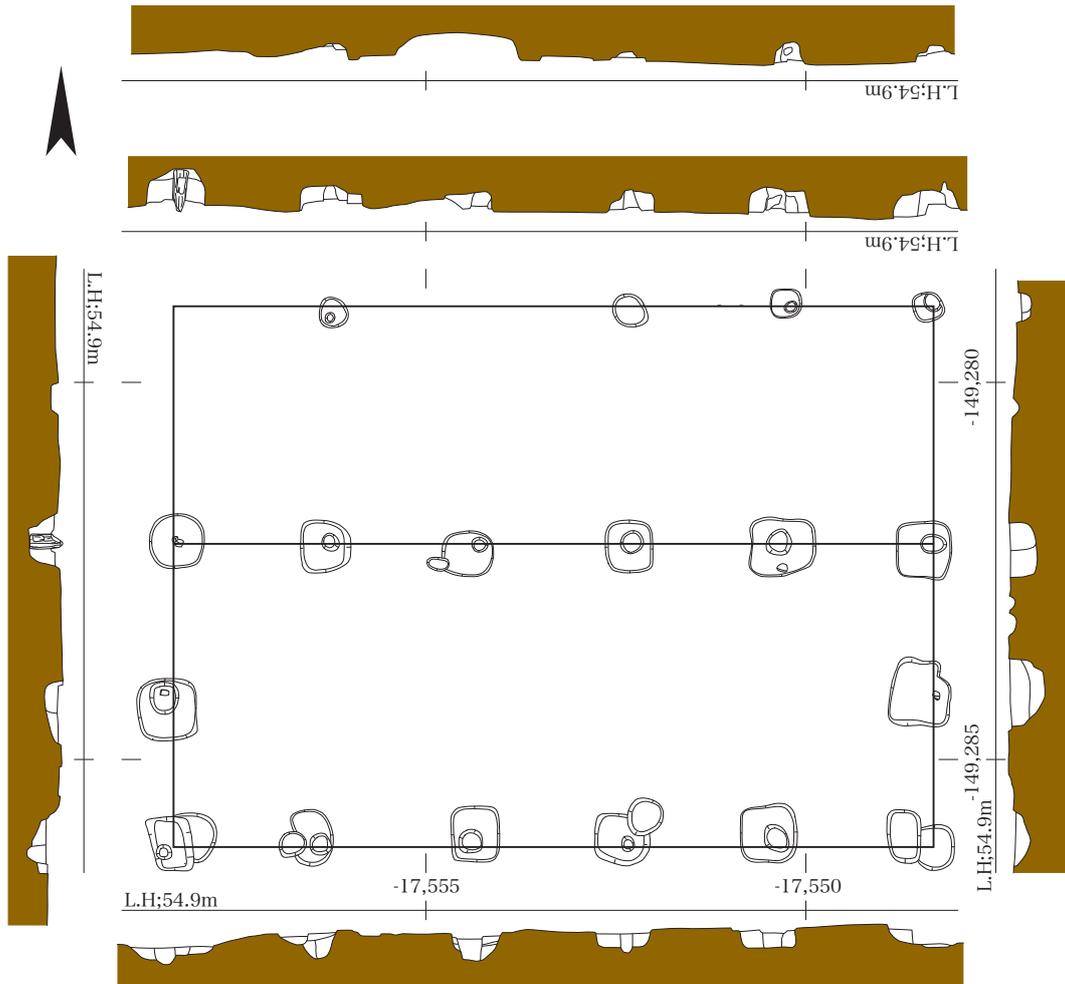


図18 掘立柱建物 SB5212 平面図・断面図 (1/100)

0 5 m

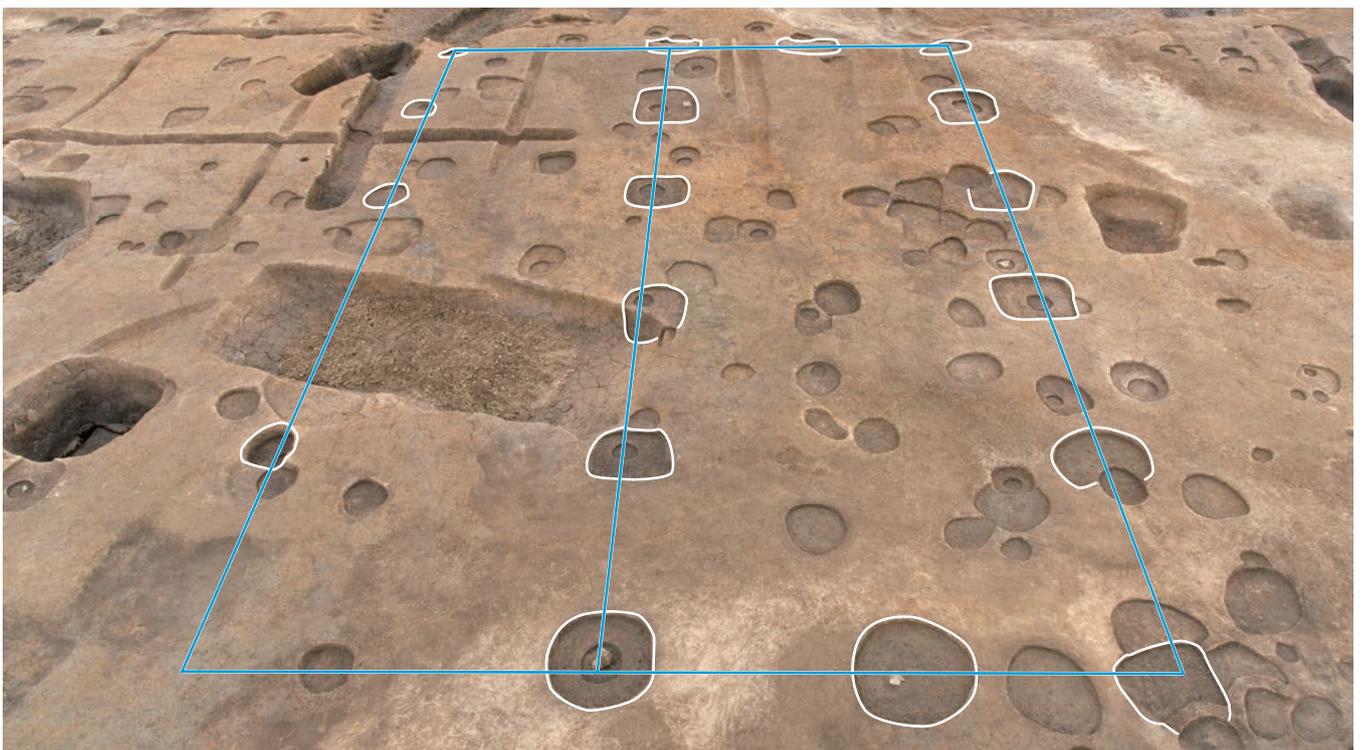


図19 掘立柱建物 SB5212 (西から)

II-4 五坪の調査

またこの時期の掘立柱物の特徴として、建物の方位が北で東に傾く点があげられる。全般的に建物数が少なく、当該期の遺構を確認できない宅地もある(宅地2・3)。

宅地1 宅地中央部に桁行3間以上の廂付の小規模建物(SB5220・5221)2棟を「L」字状に配す。

宅地4 宅地北側を掘立柱塀SA5202で閉鎖し、中央西端に門SB5211があることから、西入りの宅地であることがわかる。門を入った正面の空間を囲むように、桁行3～5間の3棟の小規模建物(SB5205・5208・5214)がある。井戸SE5504は宅地の南西部にある。

宅地5 小規模な東西棟建物2棟がやや距離をもって宅地中央の東西に並ぶ。廂付のSB5237が中心建物か。宅地の中央南端に井戸SE5510がある。

宅地6 掘立柱塀SA5247、井戸SE5514の2遺構があるのみである。地下遺構を残さない簡易な建物があったのであろうか。I期と同様に土地利用は希薄である。

この他の宅地は、遺構がほとんどなく詳細は不明。

III期

II期から引き続き、五坪中央には南北方向の坪内通路が存続し坪内を東西二分するが、南北の区画を示す遺構はない。しかしながら、ほぼ五坪内を1/32分割する区画内に井戸1基が収まっており、井戸1基が1宅地に配されると想定すると、1/32町規模宅地が復原できる。また1/32分割線をまたぐ掘立柱建物もほとんど無いことも、1/32町規模の宅地の存在を示している。

これらのことから、当該期は五坪中央を南北方向の坪内通路で東西二分し、さらに東半部を東西二分、南北八等分して小規模宅地を作り出していることが判明する。1つの小規模宅地の規模は東西31.5m、南北14.9m、面積469.35㎡である。南北の幅は、南側の九条大路北側溝北肩から北側の九条条間南小路南側溝南肩との間の距離を八等分した値となっている。

宅地が隣接し合うことから、五坪中央の宅地10～15は宅地内への入口を西側の坪内通路に開かざるを得ず、またその東に隣接する宅地2～8も入口を東に面する東三坊坊間路に開かざるを得ないこととなる。

建物の建替が一部の宅地であり、III期はIII-1期とIII-2期の2時期に細分できる。III-2期には宅地7と15、8と16はそれぞれ合わさり、1/16または1/8町規模の宅地となる。

宅地9～14の6区画の全域が明らかになったが、宅地14は井戸SE5516を1基を検出したのみで、建物跡を確認していない。宅地は中少規模の掘立柱建物2～3棟と井戸1基で構成され、建物には廂付建物や総柱建物

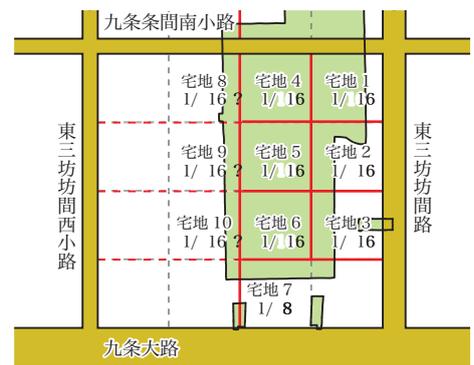
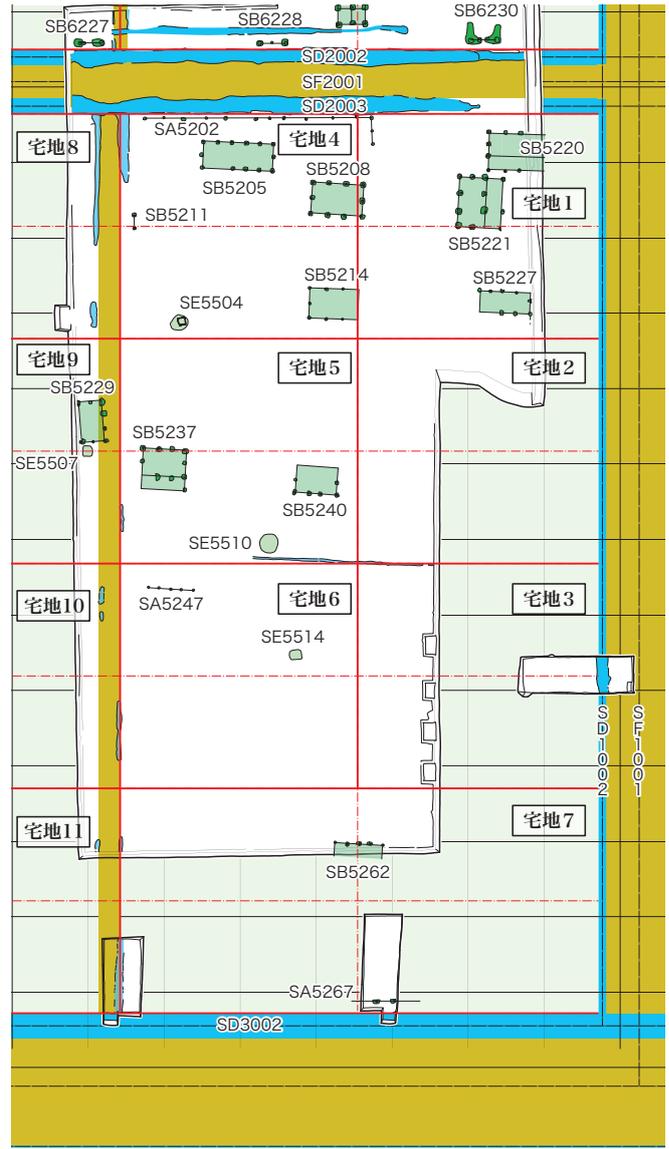


図20 II期遺構配置図

南北方向の坪内通路で坪内を東西二分する。さらに溝・塀等で16区画の1/16町規模宅地を作る。南端の宅地7は、2つ分の宅地を合わせた1/8町規模の宅地と考えられる。宅地出入口は、南北通路と東三坊坊間路側に開かれる。宅地内は、桁行3～4間の小規模建物2～3棟で構成される。建物方向が北で東に振れる特徴がある。(8世紀後半～末)

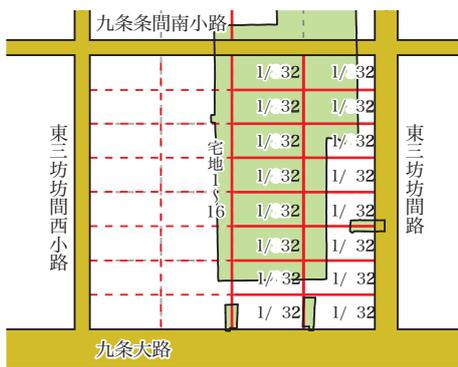
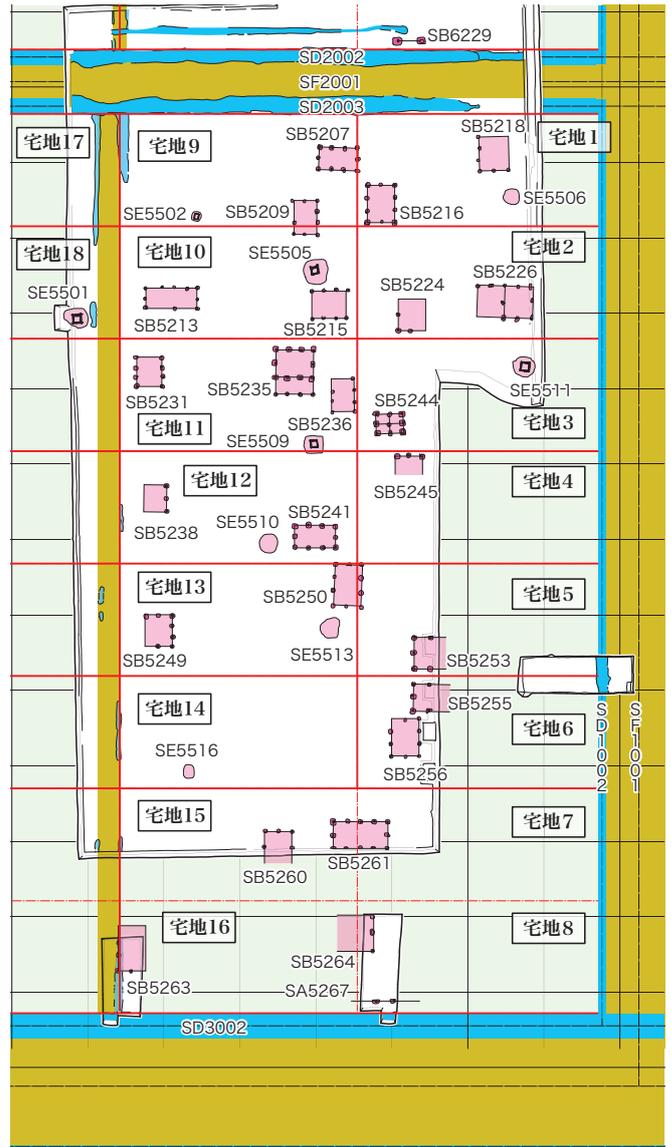
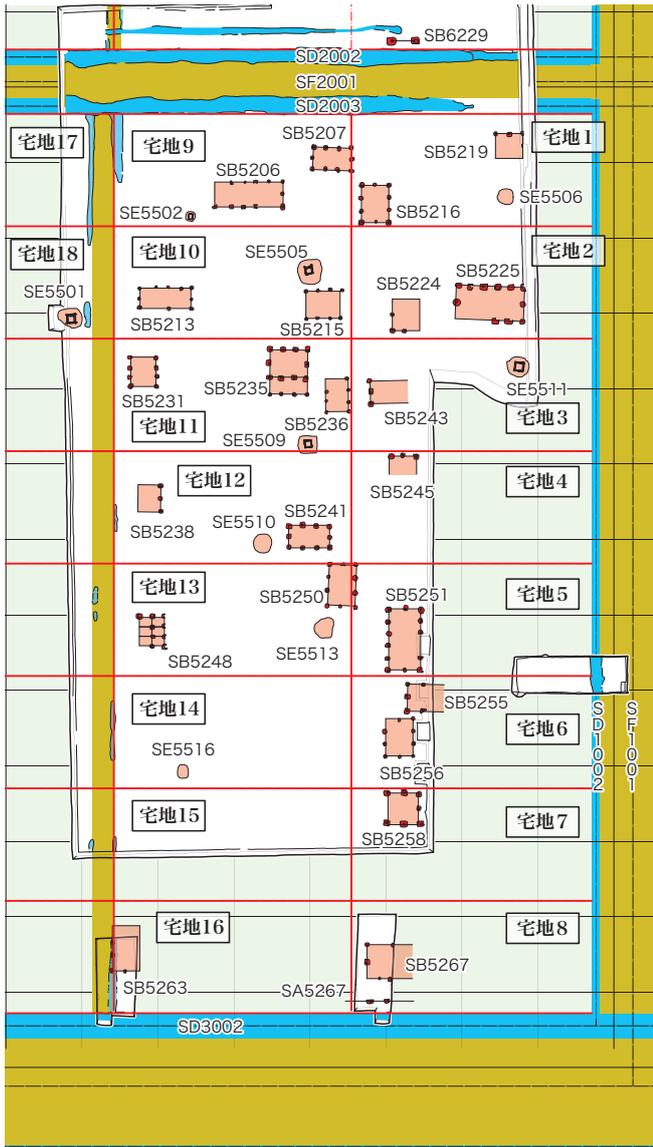


図 21 III期遺構配置図(上左III-1期、上右III-2期)

南北方向の坪内通路によって坪内を東西二等分する。さらに東西二等分、南北八等分し、南北通路または東三坊坊間路側に出入口を設けた1/32町規模の宅地を32区画作る。III-2期には、南側の宅地が合併し1/16町規模以上の宅地となる。宅地内は、桁行2~3間の小規模建物2~3棟で構成されるものが多い。(8世紀末~9世紀後半)

もあり、桁行も2~5間と多種多様である。建物の方向はおおむね真北を向く。

宅地1 宅地東側(東から入って入口側)に1棟の建物と井戸を、西側(奥側)に1棟の建物を配す。

宅地2 宅地中央部に桁行5間の比較的大きな東西棟建物SB5225を、西側に桁行2間の小さな建物SB5224を配す。SB5225はIII-2期にSB5226に建替る。

宅地3~8 宅地の西側(奥側)部分のみを調査したに過ぎないが、建物の検出率が高く、後述の宅地10~13のように入口側と奥側に分布する建物配置がうかがえる。一方、井戸は奥側で見つかっておらず、宅地1・3のように入口側に配置されていたと想定される。III-2期に西側の宅地と合わさる宅地7は、桁行5間の比較的大きな建物を中央部に配す。

宅地9 宅地の東側(西から入って奥側)に桁行5間と3間の東西棟建物SB5207・5206を雁行形に配す。

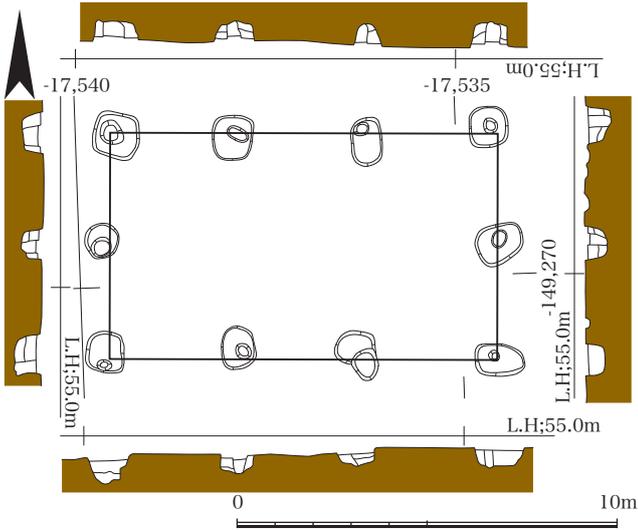


図22 掘立柱建物 SB5207 平面図・断面図 (1/100)

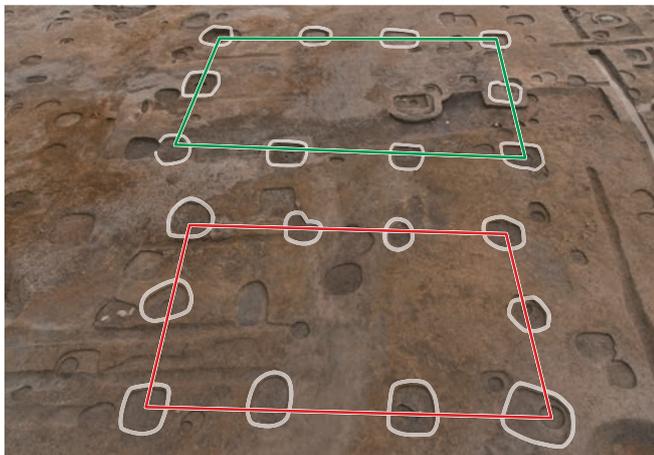


図23 掘立柱建物 SB5207 (赤)・5208 (緑) (北から)

SB5206 はⅢ-2 期に桁行 3 間の南北棟建物 SB5209 に建替られる。

宅地 10～13 いずれも宅地西側 (入口側) に 1 棟の建物を、東側 (奥側) に 1 棟または 2 棟の建物と井戸を配す点で共通する。建物の規模・形態は様々であるが、宅地内の東側の建物の方が西側に比べ規模が大きい傾向がある。

井戸

17 基検出しており、井戸枠が残存するものが 8 基ある。Ⅰ期のものが 5 基、Ⅱ期のものが 4 基、Ⅲ期のものが 9 基ある。Ⅱ期の SE5504 はⅠ期の SE5503 の同じ場所での造り替え、Ⅲ期の SE5510 はⅡ期から引き続き利用する。各井戸の規模等の詳細は一覧表に記し、主要なものについて記述する。また井戸出土土器から見た各時期の年代は、下記の通りである。

- Ⅰ期 8 世紀中頃～後半
- Ⅱ期 8 世紀後半～8 世紀末
- Ⅲ期 8 世紀末～9 世紀後半

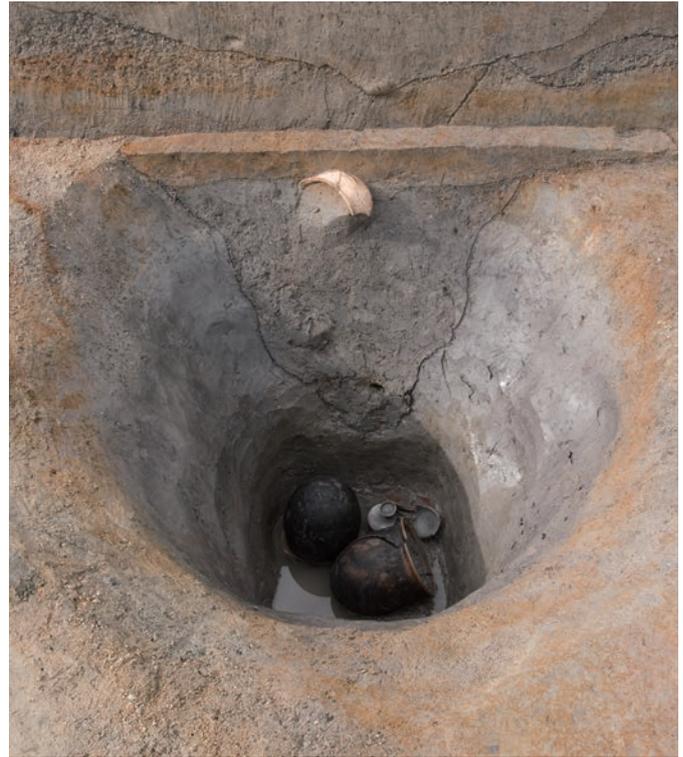


図24 井戸 SE5515 (西から)

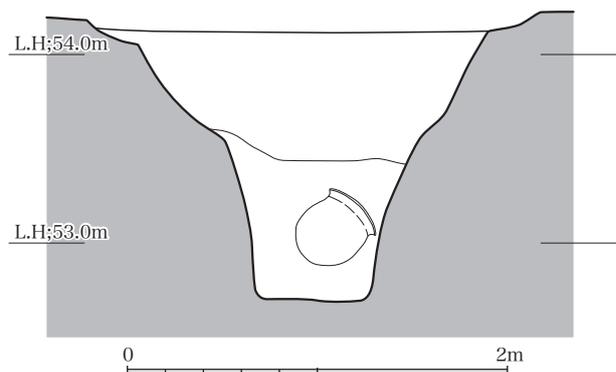
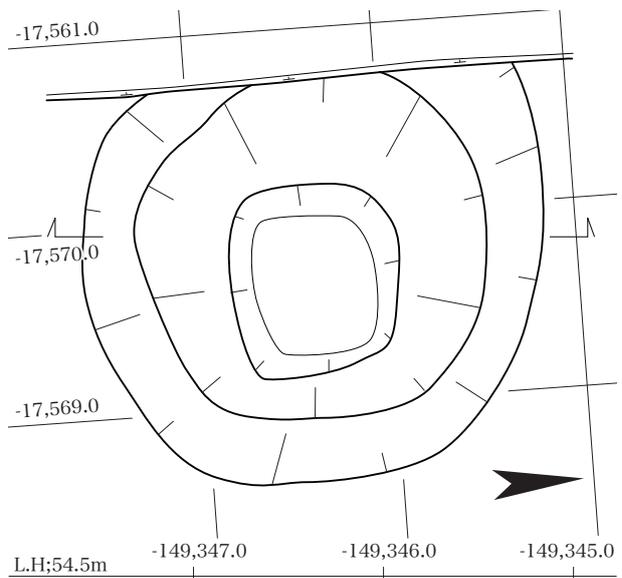


図25 井戸 SE5515 平面図・立面図 (1/40)



図26 井戸 SE5509 (西から)



図28 井戸 SE5511 (南から)

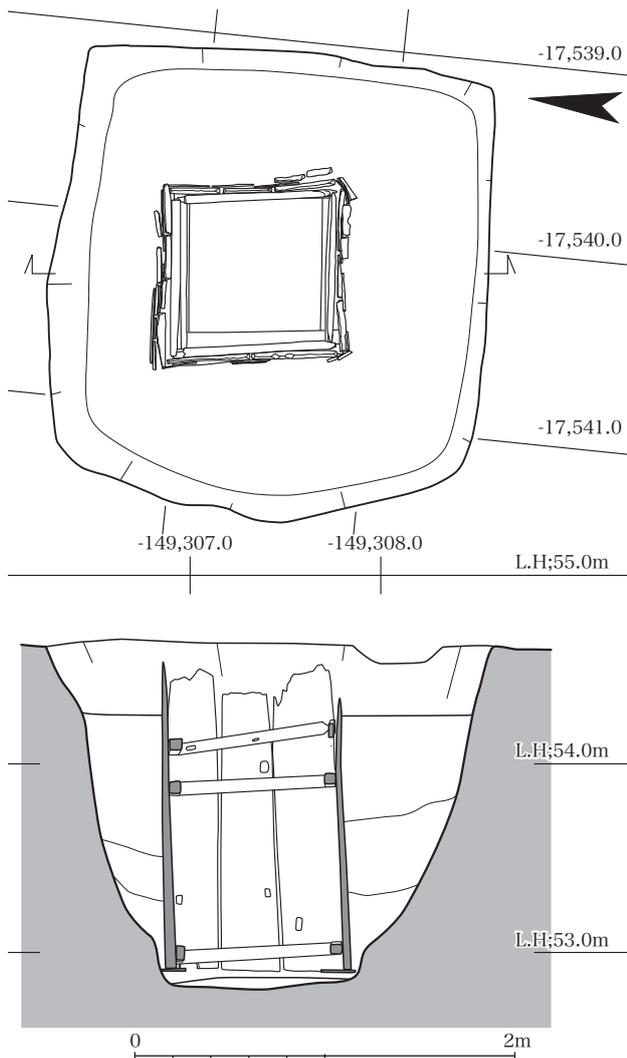


図27 井戸 SE5509 平面図・立面図 (1/40)

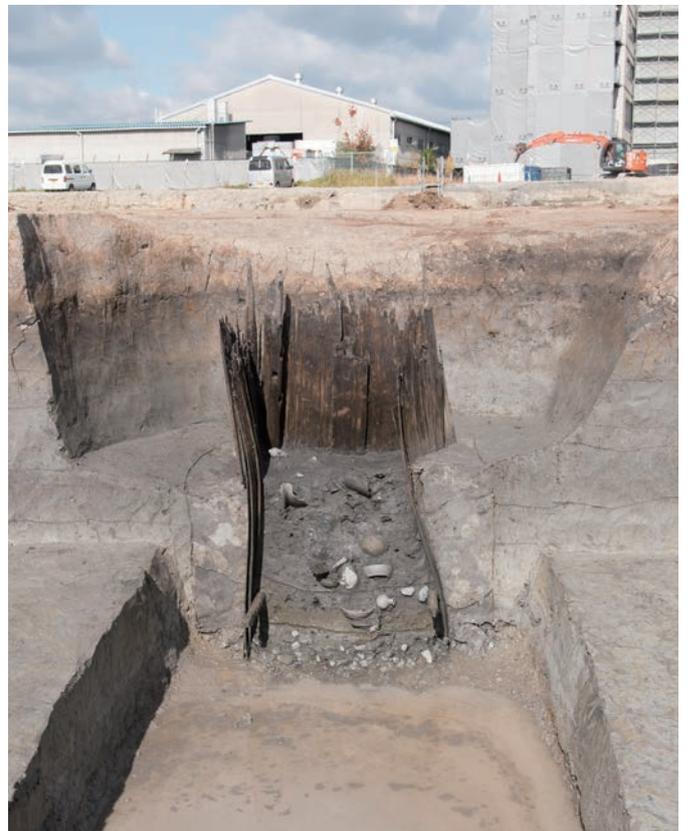


図29 井戸 SE5505 (南から)



図30 井戸 SE5512 (南から)



図31 井戸 SE5501 (東から)

Ⅲ期の期間が長い、多くの井戸は9世紀時初めまでと考えられ、9世紀後半まで残る井戸はSE5501のみである。主要なものについて記す。

SE5515 宅地11内の井戸で、井戸枠は確認していない。掘方の上部が平面円形で搦鉢状、下部が平面方形でほぼ垂直に掘り込まれており、平面方形の井戸枠を抜き取ったものと考えられる。抜き取り後の井戸内に完形の土師器甕を含む多くの土器を廃棄する。

SE5509 方形縦板組横棧留の井戸で、厚さ約4.0cmの厚手の木材を内側の縦板に、厚さ1.0cmの薄板を外側縦板に使用し二重とする。底には沈み込み防止に幅約16.0cm、厚さ約1.0cmの板を敷く。

SE5505・5511 いずれも方形縦板組隅柱横棧留の井戸。縦板は厚さ1.0～2.0cmの薄手の板で、複数枚を重ね合わせ横棧の外側に沿って隙間なく並べる。

SE5512 井戸枠は上下2段で構成される。下段に木櫃の底を抜いたものを据え、その上に内法約1.05mの方形縦板を組む。

SE5501 井戸枠は上下2段で構成され、下段に底を抜いた木櫃を据え、その上に内法約1.0mの方形の井籠組みをつくる。横板は厚さ約5.0cmあり、構造・部材とも五坪内の井戸の中で最も立派なものである。

その他の遺構

I期の宅地4では幅0.3～0.4m、深さ約0.1mの素掘小溝が東西南北方向に走る。中近世素掘小溝と形態的に同じであるが、重複関係からI期の柱穴より新しくII期の柱穴より古いものがあり、古代のものが抽出できる。溝は東西南北方向に一定間隔で数条が平行してあり、重複関係から南北方向のものが東西方向に比べ古い。同様な古代の素掘小溝は、近年平城京内でも多数見つかっているが性格は不明である。

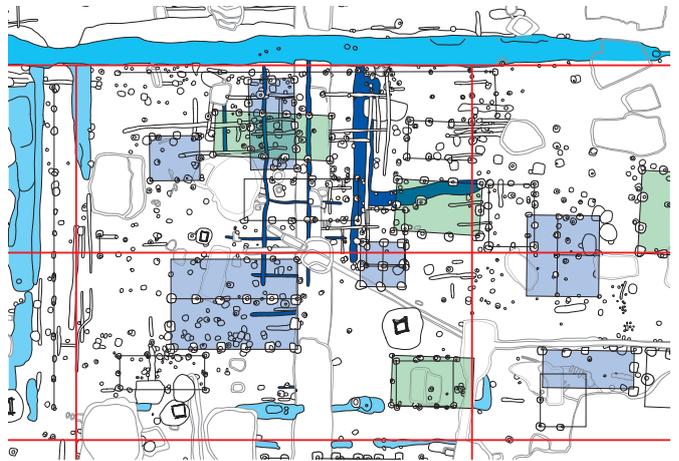


図32 古代素掘小溝分布図 (濃い青色部分 1/600)

5 六坪の調査

六坪では坪内南東部を調査し、奈良～平安時代の掘立柱建物 26 棟、掘立柱列 4 条、井戸 3 基、溝 9 条他を検出した。遺構の重複関係から大きく 3 時期の遺構変遷が確認でき、また建物配置と溝の位置関係から 1/4・1/8 町規模の宅地が復原できる。

六坪の東西中央部の南端では、南北溝が 2 条平行してあり、この溝に挟まれた幅約 1.5 m の空間が、六坪内中央を南北に分割する坪内通路と考えられる。長さ約 5.0 m 分を検出したのみで消長は不明であるが、奈良・平安時代を通じて存在したと仮定して以下各時期ごとに記述する。また六坪南側には条坊道路との閉塞施設が想定さ

れるが、東側で閉塞施設は確認することはできなかった。

掘立柱建物

I 期

六坪内南北 1/2 ライン上には東西方向の坪内通路があり坪内を南北に二分する。坪内通路は西で北に傾き、南北両側溝間で幅約 1.6 m ある。通路の北側には 1/16 町規模以上の宅地 1 があり、南側には東西に長い 1/8 町規模の宅地 2・3 が南北に並ぶ。

宅地 1 六坪東側 1/4 ライン上に建物や区画施設が存在せず、東西に分割していたかは不明。桁行 3 間の東西棟建物 SB6203・6206 が宅地南端に東西にならび、その間を塀 SA6204 で区画する。

宅地 2 六坪東側 1/4 ライン上に建物や区画施設が

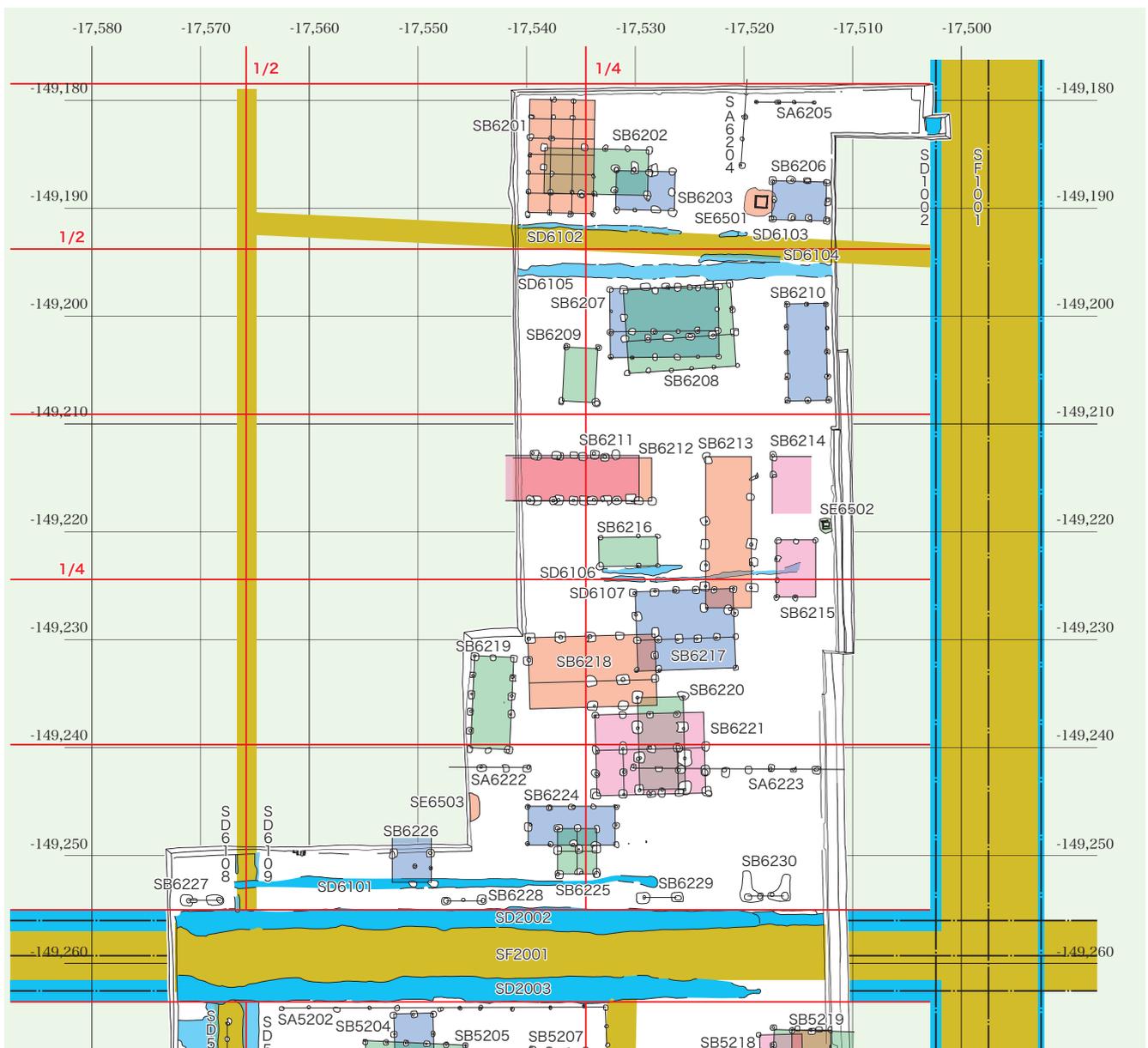


図 33 六坪遺構配置図 (1/600)

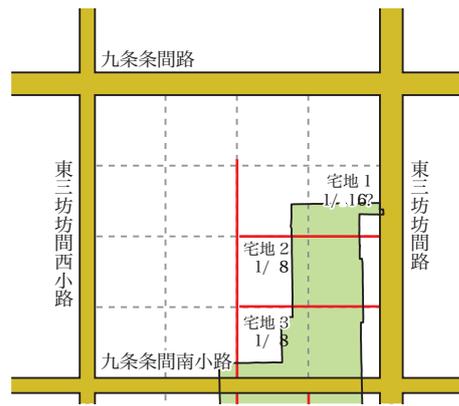
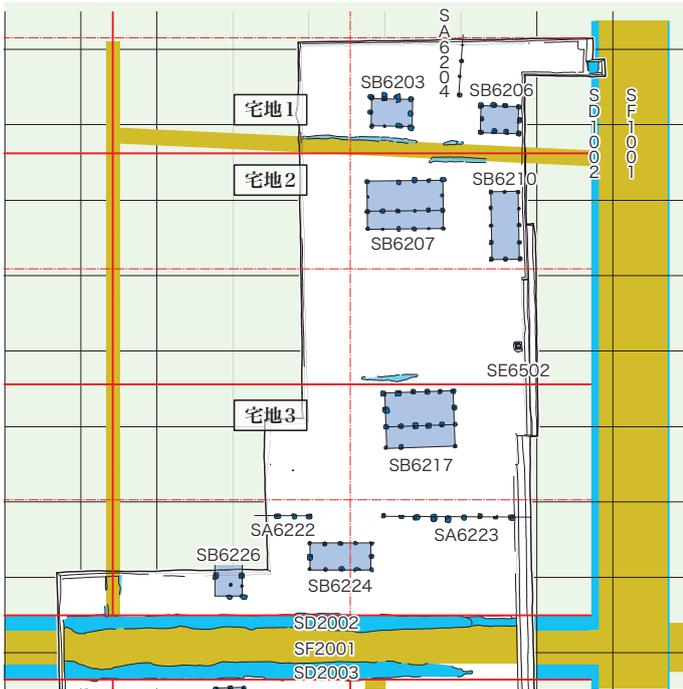


図34 1期遺構配置図

東西南北方向の坪内通路によって坪内を四等分し、南東部はさらに南北二等分し、東西に長い1/8町規模宅地を2区画つくる。北東部の宅地1は1/16町以上の規模と考えられる。南東部の宅地2・3は、桁行5間の廂付建物を中心建物とする。
(8世紀後半)

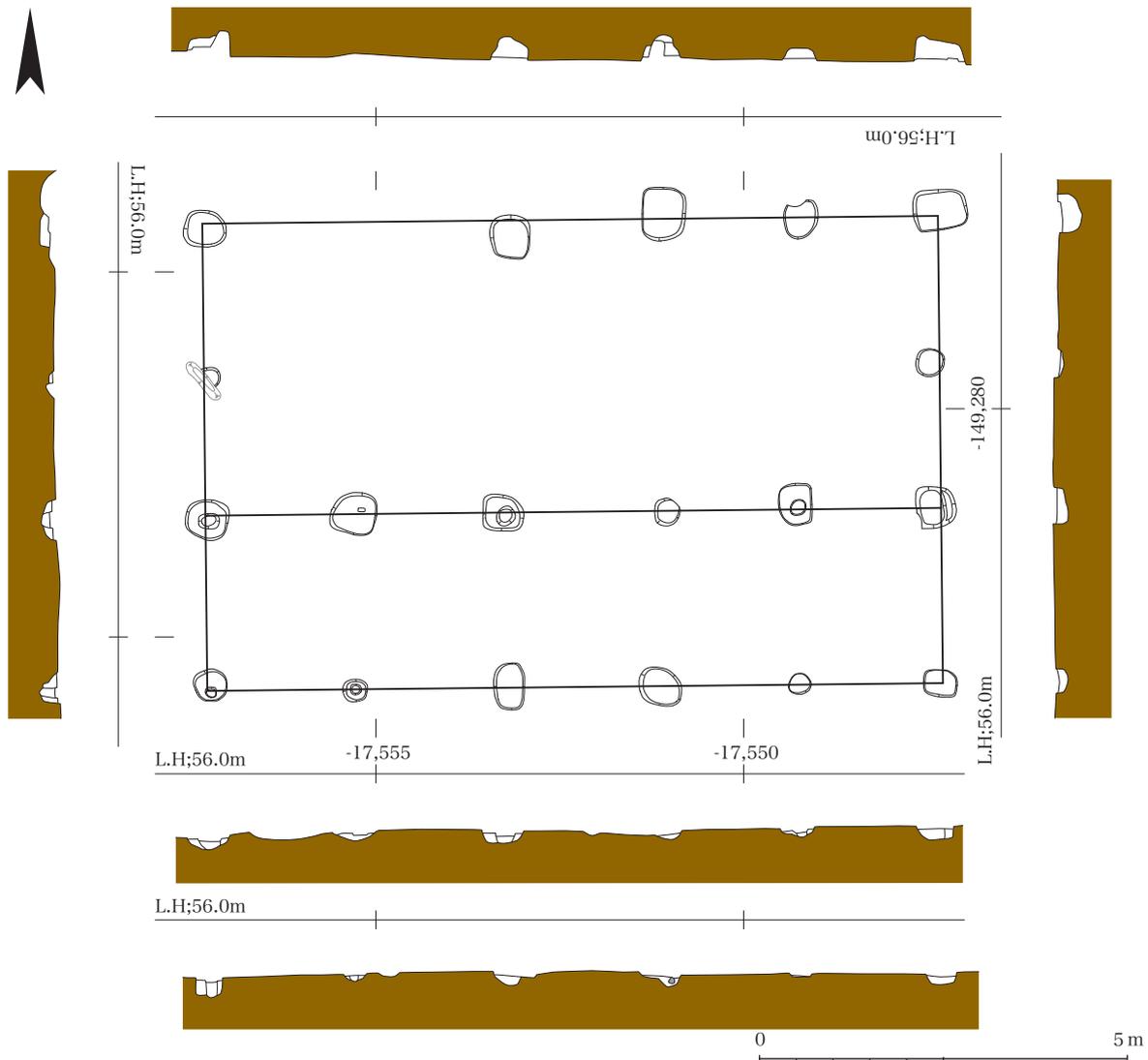


図35 掘立柱建物 SB6207 (1/100)

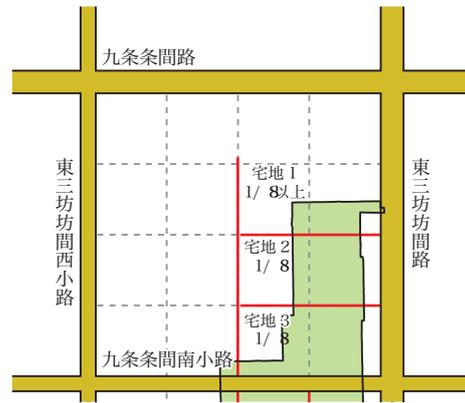
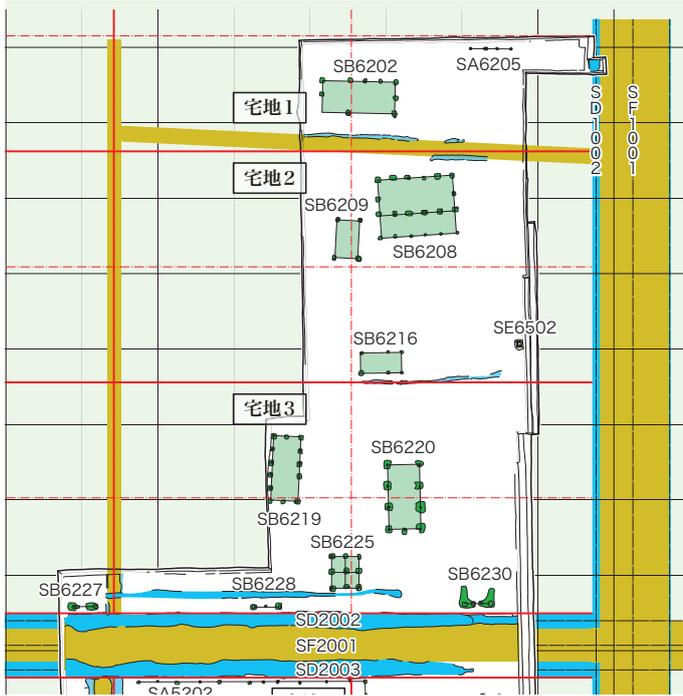


図 36 II期遺構配置図

I期の区画を踏襲し、東西に長い1/8町規模宅地が南北に3区画列ぶ。宅地2の中心建物はI期のものと同規模で同位置に建てられる。宅地3の南側には九条条間南小路に面して門が2つ築かれる。
(8世紀後半～末)

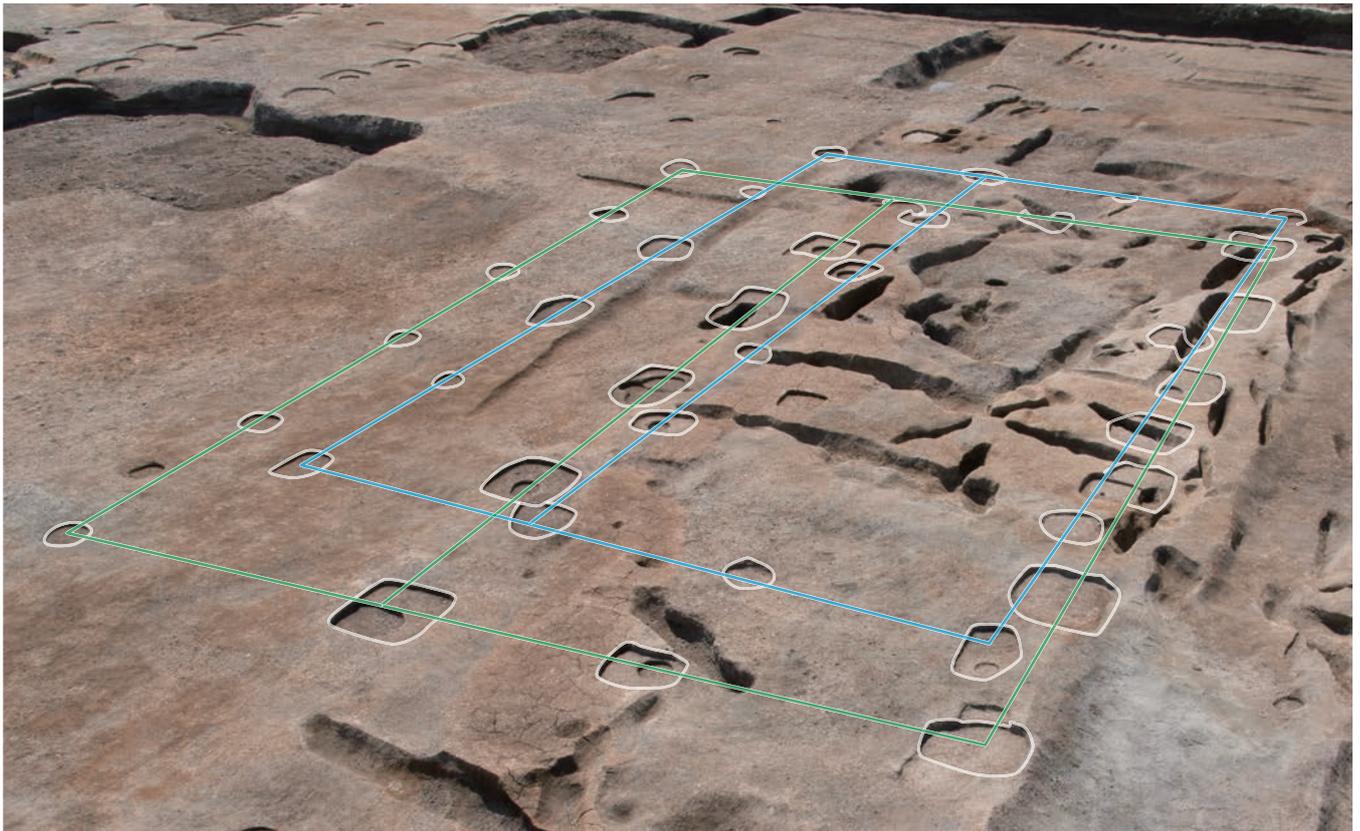


図 37 掘立柱建物 SB6207 (青)・6208 (緑) (北東から)

存在しないが、掘立柱建物 SB6207 が後述する II 期の建物 SB6208 に建替られており、1/8 町規模の II 期宅地への連続性を考慮して同規模の宅地とした。

桁行 5 間の南廂付東西棟建物 SB6207 を宅地中央北端に建て、東側に桁行 5 間の南北棟 SB6210 を配し、SB6207 を中心建物とする L 字形の建物配置をとる。宅

地南半部分は空間地で、南東部に井戸 SE6502 がある。南側の宅地 3 との境は東西溝 SD6106 で区画する。

宅地 3 中央に東西方向の塀 SA6222・6223 を設け宅地内を南北に 2 分し、北側に桁行 5 間廂付の東西棟建物 SB6217 を、南側に桁行 4 間の小規模な建物 SB6224 などを建てる。

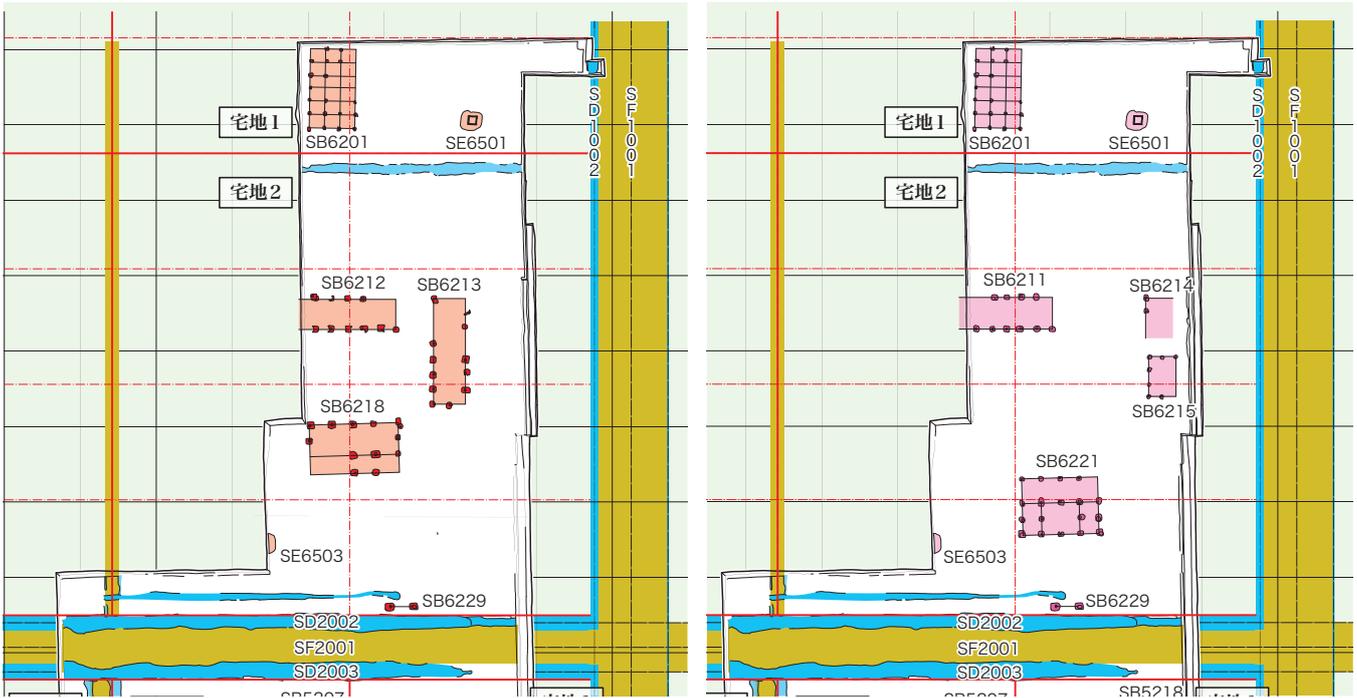
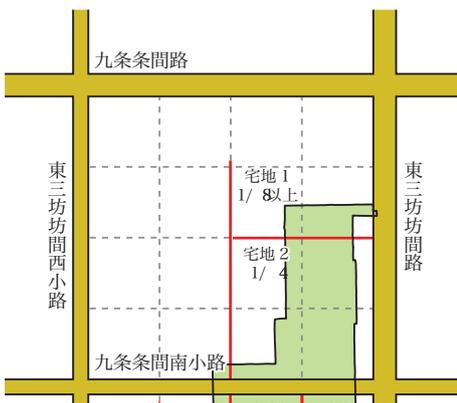


図38 III期遺構配置図（上左III-1期、上右III-2期）

東西方向の坪内通路がなくなり、溝による区画となる。南東部は1/4町規模宅地となり、建物の建替によりIII-1とIII-2期に分かれる。III-1期の宅地2は、中央に桁行5間の廂付建物を建て、その北側と東側に「コ」字状に建物を配す。南側には九条条間南小路に面して門が1つ築かれる。

（8世紀末～9世紀後半）



II期

南北1/2ライン上の坪内通路は引き続き機能し、I期の宅地配置を踏襲する。

宅地1 六坪東側1/4ライン上に桁行5間の東西棟建物（SB6202）があり、1/16町規模以上の宅地であることがわかる。

宅地2 東西棟建物SB6208がI期のSB6207と同じ位置で建てられる。建物規模がほぼ同規模で、建替と考えられる。SB6208の西側と南側には小規模な建物SB6209・6216がある。井戸SE6502は引き続き利用されていると考えられる。宅地南側は東西溝SD6107で区画される。

宅地3 九条条間南小路北側溝に沿って宅地南端に東西溝SD6101が掘られ、道路との間約1.9m間に遺構として残らない何らかの閉塞施設があったと考えられる。この部分には柱間2間以上の柱列SB6228・6230があ

り、道路に開く門と推定される。宅地内には南北棟建物SB6219・6220の2棟と総柱建物SB6225の1棟がある。

III期

坪内南北1/2ライン上にある東西通路が廃され、溝SD6105で南北の宅地を区画する。溝の北側には1/16町規模以上の宅地1が、南側には1/4町規模の宅地2がある。宅地2では建物の建替がありIII-1期とIII-2期に分かれる。

宅地1 3間×6間の総柱の南北棟建物が宅地南端の中央にあり、南東部に井戸SE6501がある。III-1・2期にわたって建物配置には変更がない。

宅地2 III-1期では桁行5間の南廂付東西棟建物SB6218と桁行5間以上の東西棟建物SB6212を、宅地中央に南北に並べ、東側に桁行7間の南北棟建物SB6213を配し「コ」字型の建物配置をとる。しかしながら、各建物の主軸や柱筋が不揃いで、やや整然さに欠

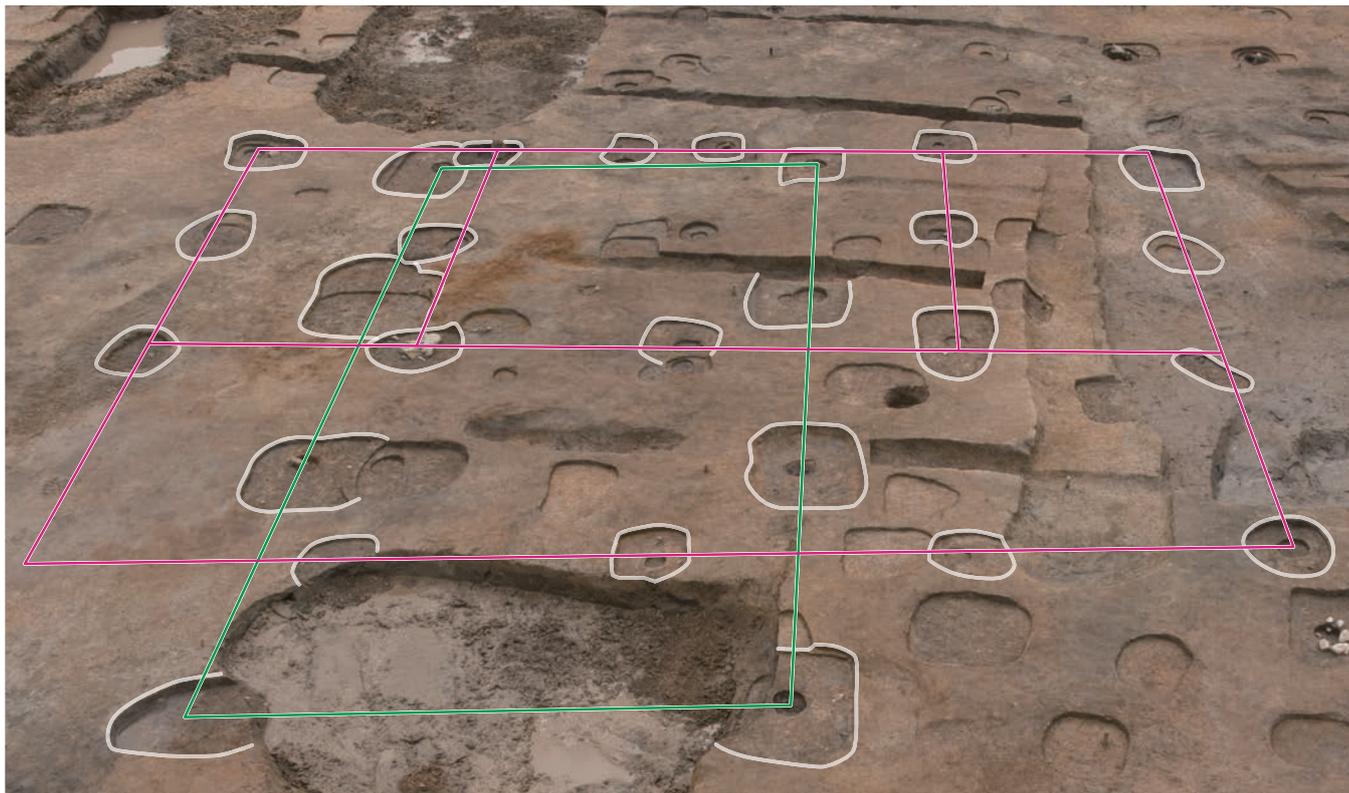


図39 掘立柱建物SB6220(緑)・6221(赤)(北から)

ける。宅地南西部には、井戸SE6503があり、南端には門と考えられる柱列SB6229がある。

Ⅲ-2期には、Ⅲ-1期の建物とほぼ同じ場所で建替が行なわれ、桁行5間の北廂付東西棟建物SB6221を中央に、北側に桁行6間以上の東西棟建物SB6211、東側に桁行3間の南北等建物SB6214・6215の2棟が配される。井戸SE6503は引き続き利用されている。

井戸

3基検出し、全て井戸枠が残存する。Ⅰ・Ⅱ期のものがSE6502、Ⅲ期のものがSE6501・6503である。Ⅰ・Ⅱ期の時期については不明な点が多いが、井戸出土遺物からおおよそ以下のように考える。

Ⅰ期 8世紀後半

Ⅱ期 8世紀後半～末

Ⅲ期 8世紀末～9世紀後半

後述するようにⅢ期の井戸SE6501からは、9世紀後半の土器がまとまって出土しており、廃絶時期は明らかである。遷都後も宅地利用が行なわれていた点は注目される。各井戸の詳細は一覧表に記す。

SE6501 方形縦板組横棧留の井戸枠である。縦板には厚さ約4.0cmの厚手の木材を利用している。9世紀後半の土器が出土しており、古代の最終期の遺構である。

SE6502 方形縦板組隅柱横棧留の井戸枠である。井戸底中央に水溜施設として方形曲物を埋め込み、その周



図40 井戸SE6503(東から)

囲に拳大の石を敷きつめる。

SE6503 方形横板組の井戸枠で、発掘区壁際にあり深さ1.1mまで掘削したが、底には至らなかった。

その他の遺構

五坪と同様な古代の素掘小溝群が、宅地1と宅地3で見られる。重複関係からⅠ期の柱穴より新しくⅡ期の柱穴より古い。溝の方向はいずれも西でやや北に傾き、2.1～2.7m間隔で平行してある。宅地1では東西南北方向のものがあり、重複関係から東西のものが南北のものに比べ古い。



図41 井戸 SE6501 (南東から)



図43 井戸 SE6502 (東から)

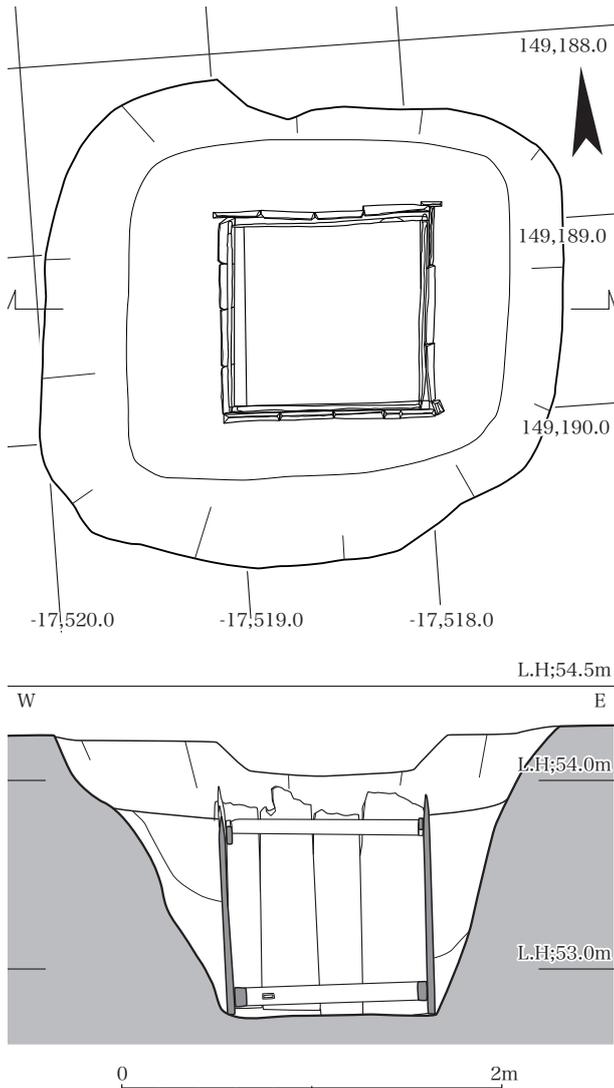


図42 井戸 SE6501 平面図・立面図 (1/40)

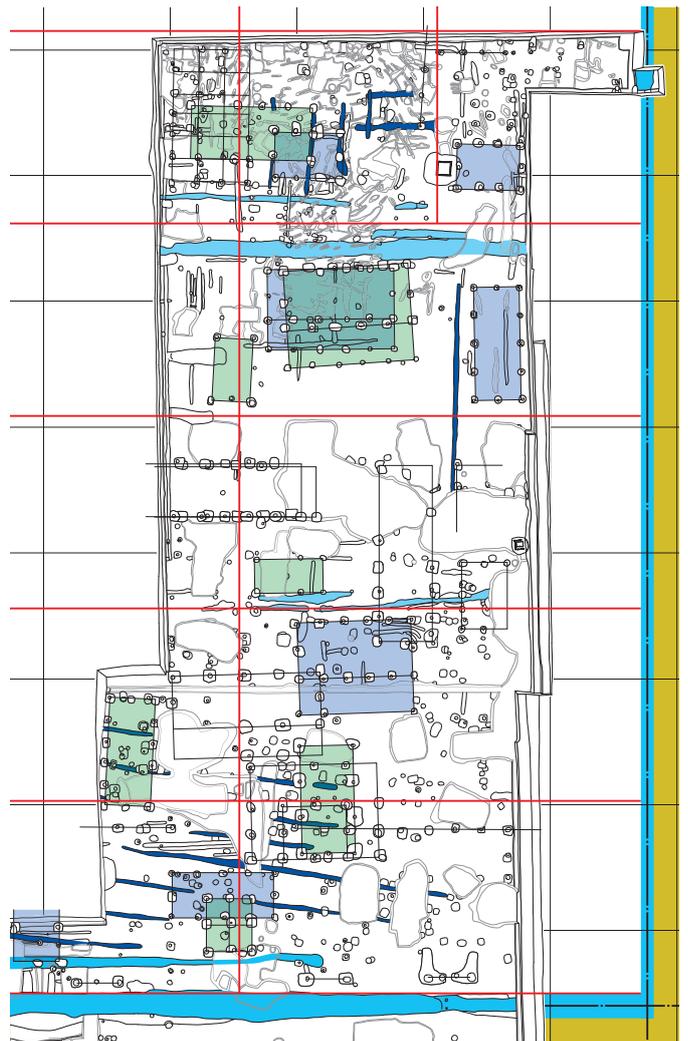


図44 古代素掘小溝分布図 (濃い青色部分 1/600)



図45 第1区全景（南西から）

6 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には、第3区で検出された溝3条がある。SD01は北東から南西方向の溝で、途中で屈曲し西方向へ向きを変える。幅2.5～3.0m、深さ0.3～0.4mあり、断面形は浅い「U」字形で、明灰色砂などの砂で埋まる。古墳時代前期の土師器小型丸底壺、二重口縁壺などが遺物整理箱2箱分出土した。SD02・03は、

SD01の北側で並行する溝で、幅0.3～1.0m、深さ0.2～0.4mある。SD01と同様の明灰色砂などの砂で埋まり、同時期のものと考えられる。

調査地の北西130mの地点の発掘調査では、古墳時代の掘立柱建物・土坑が見つかっており、周辺には古墳時代の集落があったことがわかる。



図46 溝SD01 東半部分（西から）



図47 溝SD01 土器出土状況

7 出土遺物

遺物整理箱 106 箱分の遺物が出土した。内訳は土器類が 91 箱、瓦類が 10 箱、木製品他が 5 箱である。大半は奈良・平安時代のもので、他に弥生・古墳時代、鎌倉時代以降のものが少量ある。

奈良・平安時代のもので、土師器、須恵器、黒色土器、奈良三彩、緑釉陶器、製塩土器、ミニチュア土器、土馬、陶硯、軒丸瓦 (6229 種別不明 1 点、6282D 1 点、型式不明 3 点)、軒平瓦 (6691A 1 点、6721C1 点、6802B 1 点、新型式 1 点)、丸瓦、平瓦、銭貨 2 点、鉄製品 (刀子・釘) 銅製品 (鞘金具・釘)、鞆羽口、鉄滓、木製品 (斎串、馬形、曲物、箸、横節等)、植物遺存体 (桃種、瓢箪)、ガラス玉、ガラス埴塼、砥石、井戸枠 (建築部材再用品含む) がある。また弥生・古墳時代のものには、弥生土器、石包丁、石鏃 (以上弥生)、土師器 (古墳) がある。以下主要なものについて記す。

九条条間南小路側溝 SD2002・2003 (図 48)

両側溝合わせて遺物整理箱 16 箱分の土器が出土した。土師器・須恵器の土器類が大半を占めるが、土馬・ミニチュア土器 (竈・壺) 等の出土比率が、他の遺構に比べ高い。ガラス埴塼・羊面硯・銭貨 2 点 (萬年通宝・神功開宝) 等特筆すべきものもある。土器は 8 世紀後半～9 世紀初頭のものが多く。

井戸 SE5515 (図 49・50)

五坪内 I 期の宅地 11 内の井戸である。土師器杯 A (1～3・6)・C (5)、皿 C (4)、高杯 (7) 鉢 (8)、甕 (20～22)、須恵器杯 A (12～15)、杯 B (10・11)、杯蓋 (9)、平瓶 (16)、壺 (17)、横瓶 (19)、甕 C (18) を図示した。

出土点数から、土師器甕の比率が高いことが指摘できる。土師器甕は、平城京では出土例が少ない体部が卵形で丸底のもの (22) が 2 点完形で出土しており、特徴的である。土師器杯 A (1～3) は内面の見込部に螺旋状、体部に放射状・口縁部に連弧状 (3 除く) の暗文が施される。外面底部をへらケズリ調整後、体部に横方向のへらミガキ調整する。15 の須恵器杯 A の底部には「大」の墨書がある。

井戸 SE5509 (図 51・52・55)

五坪内 III 期の宅地 11 内の井戸である。土師器杯 A (32・33)、椀 A (30～31)・C (27～29)、皿 C (24～26)、壺 B (34～36)、甕 (45・46) 黒色土器 A 類杯 A (37・38)、須恵器杯 A (40)、杯 B (41)、杯蓋 (39)、壺 H (42)、壺 L (43・44)、奈良三彩 (23)、斎串 (74～78) を図示した。

黒色土器が新たに組成に加わるが、比率は 1% に満たない。土師器約 6 割、須恵器約 4 割の比率である。奈良三彩は、平底の鉢状の器形の底部付近で、内外面に施釉する。土師器椀 A は、外面をへらケズリ調整し 31 は



図 48 九条条間南小路南北両側溝 (SD2002・2003) 出土土器・土製品

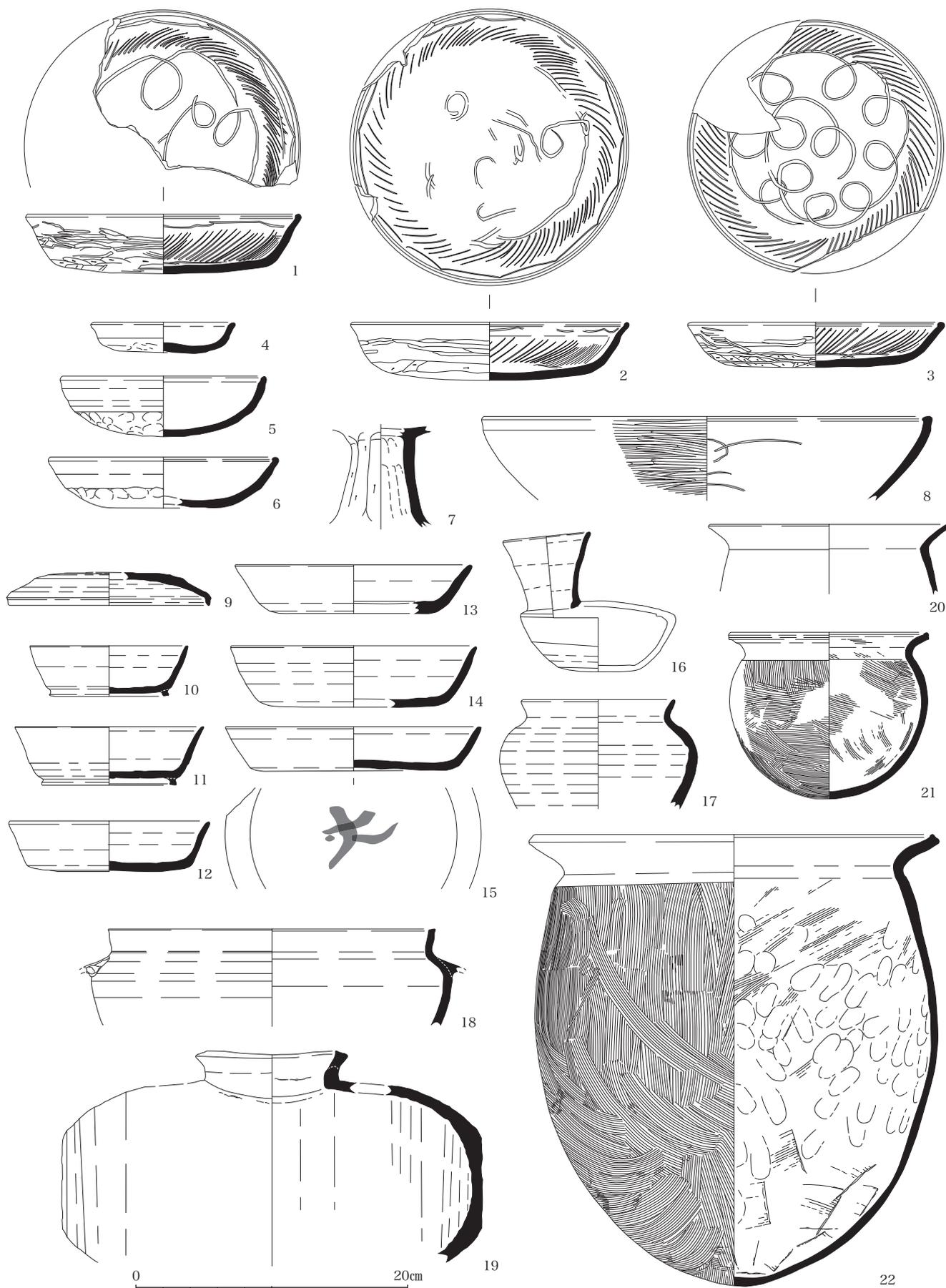


图 49 井戸 SE5515 出土土器 (1/4)



图 50 井戸 SE5515 出土土器



图 51 井戸 SE5509 出土土器



図52 井戸 SE5509 出土土器 (1/4)

その後ヘラミガキ調整する。土師器碗 C は外面未調整で指頭圧痕が残る。黒色土器杯 A は内外面を緻密にヘラミガキ調整し、内面に螺旋状の暗文を施す。壺 L はいずれも完形で口縁部が欠損し、意図的な打ち欠きが想定される。斎串は、上端を圭頭状に下端を剣先状に形づくり、側面の左右1箇所上方から切り込みを入れる。

井戸 SE6501 (図53・54・55)

六坪内Ⅲ期の宅地 I 内の井戸である。土師器杯 A (47～50)、皿 A (52～55)・C (51)、壺 B (63)、壺 E (64)、甕 (69)、竈 (73)、黒色土器 A 類杯 A (71・72)、壺

B (70)、須恵器杯蓋 (65・66)、壺 M (62)、甕 (67・68)、緑釉陶器皿 (59・60)、斎串 (81・82)、横櫛 (79)、鳥形木製品 (80) を図示した。

土師器杯類の出土比率が高まり、須恵器が相対的に低くなる。京都産の緑釉陶器が出土するが出土比率は低い。土師器の杯類は、法量が縮小し杯・皿・碗の差が認めにくくなるとともに器壁が薄くなり、新しい様相がうかがえる。外面調整はヘラケズリまたは未調整である。黒色土器杯 A は底部径が縮小し SE6501 のものに比べ型式変化が進むとともに、内面の暗文も簡略化が進む。斎串

II-7 出土遺物

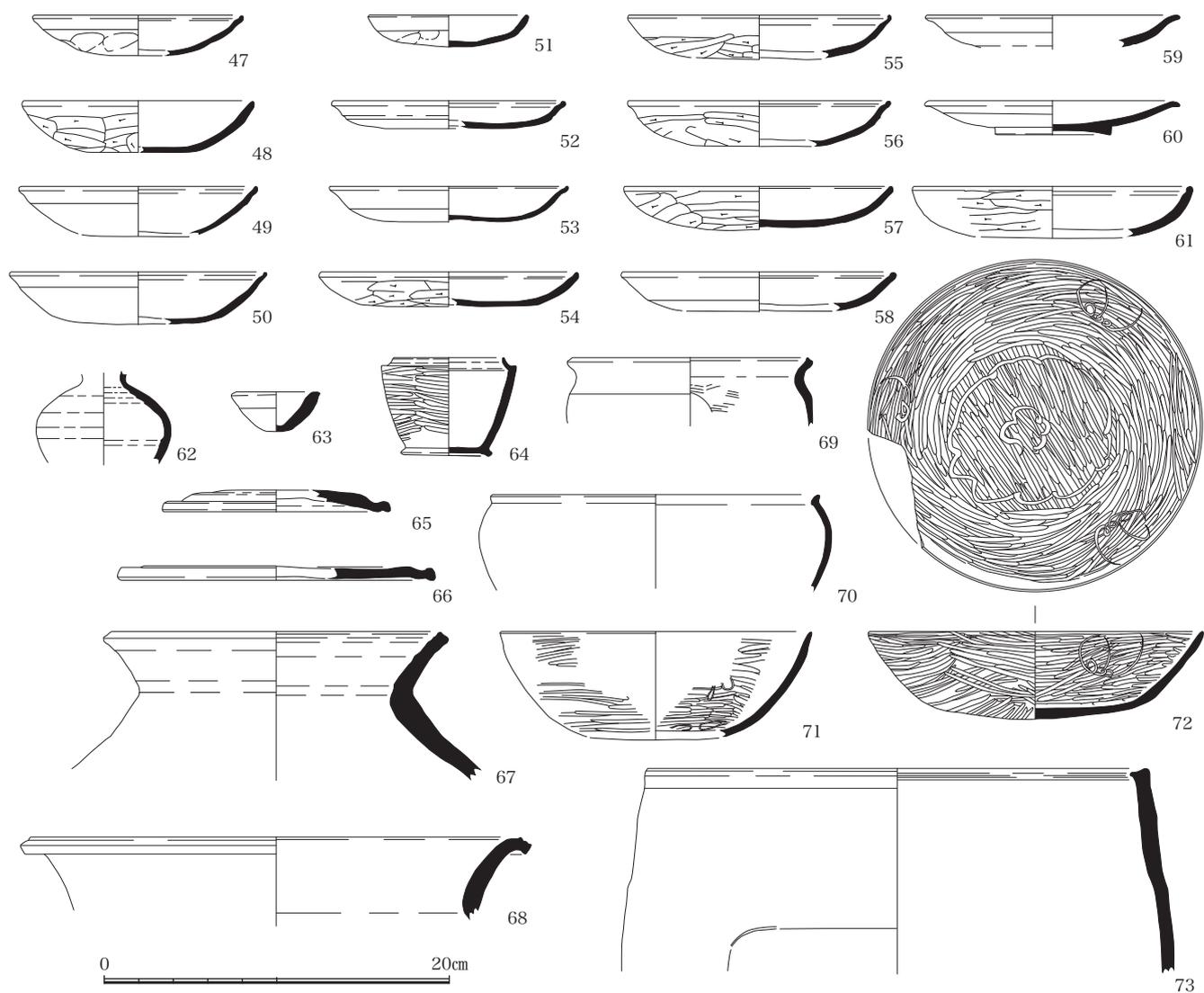


图 53 井戸 SE6501 出土土器 (1/4)



图 54 井戸 SE6501 出土土器

表3 井戸 SE5515・5509・6501 出土土器点数表

種類	分類	器種	形式	SE134		SE201		SE294	
				点数	比率	点数	比率	点数	比率
土師器	食膳具類	杯	A	13		10		31	
			C	1					
		皿	A			5		9	
			C	1		4		2	
		椀	A			2		2	
			C			4		1	
	杯皿類		2	7.83%	61	23.78%	134	44.20%	
	高杯		1		2		4		
	小計		18	7.83%	88	23.78%	183	44.20%	
	貯蔵具類	鉢		3				3	
		盤				1			
		壺	B			7			
		壺	E					1	
	小計		3	1.30%	8	2.16%	4	0.97%	
	煮炊具類	甕		176	76.52%	138	37.84%	109	27.54%
竈					2		4		
甌							1		
小計		176	76.52%	140	37.84%	114	27.54%		
合計		197	85.65%	236	63.78%	301	72.71%		
黒色土器	食膳具類	杯	A			3		10	
		小計			0.00%	3	0.81%	10	2.42%
	貯蔵具類	壺	B					1	
		小計			0.00%		0.00%	1	0.24%
合計			0.00%	3	0.81%	11	2.66%		
須恵器	食膳具類	杯	A	12		4		1	
			B	3		4		7	
		皿	A			1			
		蓋		1		2		11	
		杯皿類		1	7.39%	23	9.19%	34	12.80%
	小計		17	7.39%	34	9.19%	53	12.80%	
	貯蔵具類	鉢		2		2			
		横瓶		3				1	
		平瓶		2					
		壺	H			2			
		壺	L			3			
		壺	M					1	
		壺類		5		5		8	
		壺蓋				1			
		甕	C	1					
甕類			3		82		37		
小計		16	6.96%	95	25.68%	47	11.35%		
合計		33	14.35%	129	34.86%	100	24.15%		
奈良三彩 緑釉陶器	貯蔵具類	鉢?			0.00%	2	0.54%		0.00%
	食膳具類	皿			0.00%		0.00%	2	0.48%
総計			230	100.00%	370	100.00%	414	100.00%	

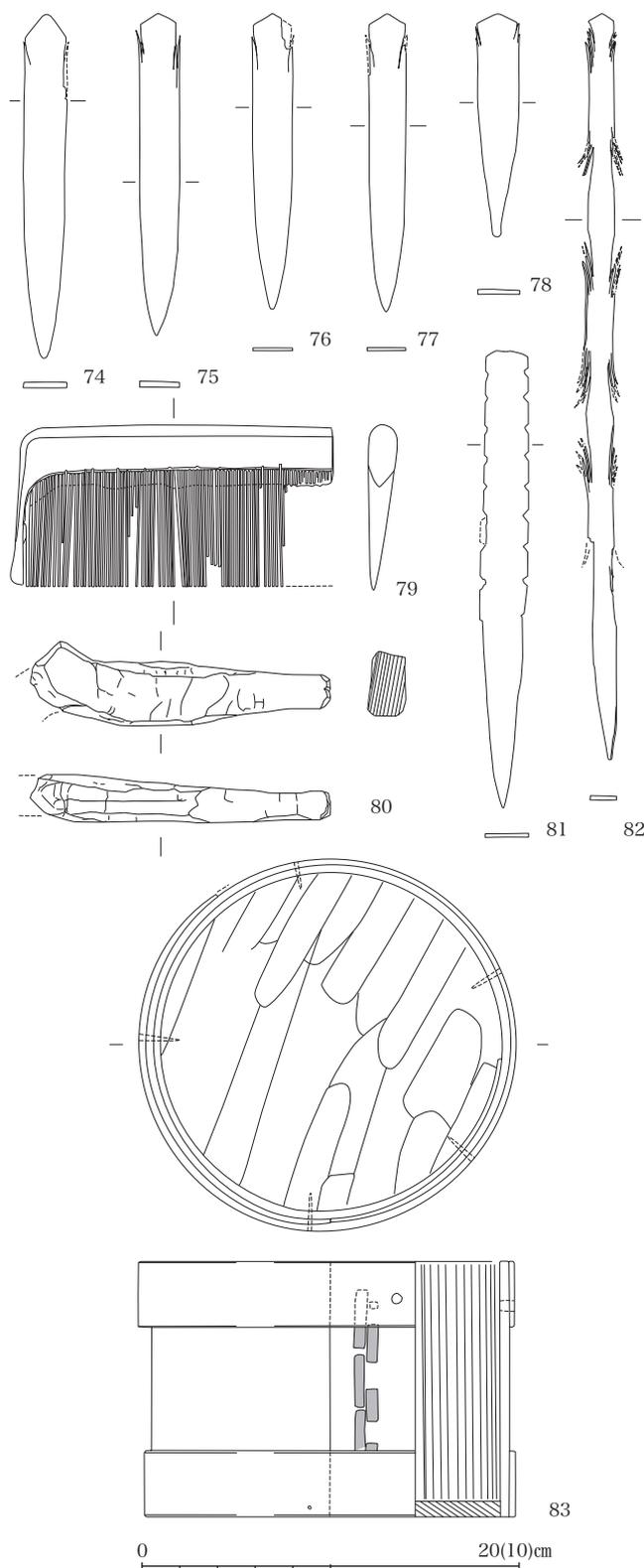


図55 井戸SE5509・5511・6501出土木製品(1/4、79のみ1/2)
 (82)は長さ34.9cmの大型品で、上端を圭頭状に下端を剣先状に形づく。側面には上下方向から3対、計6箇所
 の切り込みを入れる。1箇所切り込みは4回である。斎串(81)は、両側面の左右対象位置に三角形の切り
 欠きを8箇所入れる。横櫛は長方形で長さ8.6cm分残存

する。表面を平滑に研ぎ上げ、櫛の歯は3cm当たり31本である。80は嘴部分を欠損するが鳥形木製品と考えられ、全面に削り痕跡が残る。

井戸 SE5511 (図55)

五坪内Ⅲ期の宅地3内の井戸である。円形曲物が良好な状況で出土しておりこれを報告する。径約19.6cm、高さ13.6cmで、側板を2段内3段綴じで榿皮結合し、内面には上下方向のケビキを入れる。

Ⅲ まとめ

今回の調査の成果として下記の2点があげられる。

1 平城京の南京極である九条大路の一部を確認し、その復原の資料を得た。

従来九条大路の南北側溝と考えられる遺構は、数カ所の発掘調査で検出されていたが、大路の位置を確定するには至らなかった。今回の調査では、九条大路から1坪分北側の九条条間南小路を検出しその位置を確定した。九条条間南小路は、調査地周辺の発掘調査で検出された条坊道路との位置関係からみて、平城京の条坊計画通りに設置されていたことがわかる。条坊施工が通常通り行われているとすると、九条条間南小路から単純に1坪分(375大尺=133.2m)南に、九条大路が想定できる。C区で検出した東西溝SD3002を九条大路北側溝とすると、九条大路の幅は19.28m以下となり、三条以南で確認されている大路幅(両側溝心々間距離約16m=45大尺)と遜色のない値となることから、九条大路の復原としては妥当と考えられる。

また従来、九条大路跡と推定されていた東西方向の遺存地割は五坪の宅地内にあることがわかり、九条大路を反映したものでないものと考えられる。

2 平城京内の小規模宅地の様相と変遷が判明した。

五坪東半部では、坪内通路と井戸の配置から1/16～1/32町規模の小規模宅地が確認でき、奈良～平安時代にかけての変遷が明らかになった。

五坪内の宅地規模はおおよそ1/16町→1/16町→1/32町と変遷する。宅地分割の方法は、坪内を東西南北に四等分して1/16町規模宅地を創出し、これをさらに南北二等分して1/32町規模宅地とする。

また、当初は坪内通路を東西南北方向の縦横に設け1/16町規模の宅地を区画していたが、その後坪内中央の南北方向の坪内通路1条のみとして、通路両側に1/16町規模の宅地を配し、さらにその後この宅地を南北二分し1/32町規模の宅地とする。

坪内通路を南北方向の1条のみとすると、各宅地の出入口が南北通路または条坊道路に面した東西側に限定される一方、坪内の宅地利用可能面積は通路分が差し引かれることなく最大限に利用できる利点がある。奈良時代後半の平城京では小規模宅地の増加が指摘されており、人口増による宅地不足に対する宅地班給上の対策とも考えられる。この宅地配置形態は、平安京に見られる「四行八門制」と同形態といえよう。

文献資料には、平城京の小規模宅地を示す記述に「十六

分之半」(1/32)、「十六分之四一」(1/64)との記述があり、宅地面積の基準として1/16町が当てられている。⁹⁾これにより当初1坪を16等分する宅地区画があり、時代が降るに従い細分化されていったことがうかがえる。奈良時代の1/16町規模宅地は、一辺1/4町四方の正方形の区画であることが原田氏によって指摘されており¹⁰⁾、その後の発掘調査成果からも肯定できる。今回の調査では、この正方形の1/16町規模宅地が南北に分割され1/32町規模宅地に変化したことが明らかになった。

以上の点から五坪の宅地変遷をまとめると、

I期 東西南北方向の坪内通路で区画された、奈良時代的な1/16町規模宅地

II期 四行四門制ともいえる宅地分割

III期 四行八門制と同形態の宅地分割

となる。平城京内では同様の変遷が追えない調査例もあり一般化できないが、奈良から平安時代への小規模宅地の変化を考える一例として貴重な成果といえよう。

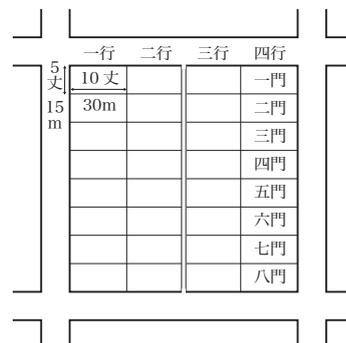


図56 平安京四行八門制

- 1) 奈良市教育委員会「その他の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1990
- 2) 奈良国立文化財研究所『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告書』1986
- 3) 奈良国立文化財研究所『平城京東堀河 左京九条三坊の発掘調査』1983
- 4) 奈良国立文化財研究所「左京九条三坊の調査 第148次」『昭和57年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概要』1983
- 5) 奈良市教育委員会「平城京跡(左京九条三坊十一・十二坪)の調査 第538次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成17年度』2008
- 6) 大和郡山市教育委員会・(公財)元興寺文化財研究所『平城京十条発掘調査報告書』2014
- 7) 福山敏男「服寺と蓼原堂」『奈良朝寺院の研究』1948
- 8) 奈良文化財研究所『平城京条坊総合地図』2003
- 9) 家原圭太「平城京における宅地の構造・分布・変遷」『平安京と貴族の住まい』2012など
- 10) 原田憲二郎「平城京の小規模宅地」『都城制研究5』2011

表4 掘立柱建物・掘立柱列一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法(m)		廂の出	時期	備考
		梁行×桁行			桁行	梁行			
SA 5201	南北	12			北から 1.8-1.8-3.3-1.5-1.5-1.8-1.8-1.5-2.1--2.7-1.8-1.8-2.1			I 期	
SA 5202	東西-南北	東西 11-南北 2			西から 2.5-2.5-3.0-2.5-4.8-1.8-1.8-2.7-3.6-3.1-2.0-2.1-2.1			II 期	
SB 5203	東西	2×2	4.0	3.6	西から 2.1-1.9	1.8 等間		I 期	
SB 5204	南北	2×4	7.2	3.6	1.8 等間	1.8 等間		I 期	
SB 5205	東西	2×5	9.2	3.6	西から 2.0-1.8-1.8-1.8-1.8	1.8 等間		II 期	
SB 5206	東西	2×5	9.0	3.3	西から 2.4-1.5-1.5-1.8-1.8	北から 1.5-1.8		III-1 期	
SB 5207	東西	2×3	5.1	3.0	西から 1.8-1.65-1.65	1.5 等間		III 期	
SB 5208	東西	2×3	6.75	4.1	2.25 等間	2.1 等間		II 期	
SB 5209	南北	2×3	4.5	3.0	1.5 等間	1.5 等間		III-2 期	
SB 5210		2×2	3.6	3.6	1.8 等間	1.8 等間		I 期	総柱建物
SB 5211	南北	南北 1	1.8		1.8			II 期	門
SB 5212	東西	2×5	10.0	4.0	2.0 等間	2.0 等間	北 3.15	I 期	
SB 5213	東西	2×4	6.75	2.7	西から 2.1-1.65-1.5-1.5	北から 1.5-1.2		III 期	
SB 5214	東西	2×4	6.45	4.0	2.15 等間	2.0 等間		II 期	
SB 5215	東西	1×3	4.5	3.6	1.5 等間	3.6		III 期	
SB 5216	南北	2×3	4.95	3.6	1.65 等間	1.8 等間		III 期	
SB 5217	南北	2×4	6.45	3.3	北から 1.5-1.65-1.65-1.65	1.65 等間	西 2.4	I 期	中央に間仕切りあり
SB 5218	南北	2×3	4.5	3.9	1.5 等間	1.95 等間		III-2 期	
SB 5219	東西?	2?×2?	3.6?	1.65 以上	1.8 等間	1.65		III-1 期	
SB 5220	東西	2×3 以上	4.1 以上	3.0	2.1 等間	1.5 等間	南 1.8	II 期	
SB 5221	南北	2×3	6.6	3.6	北から 2.1-2.4-2.1	1.8 等間	東 2.1	II 期	
SB 5222	東西?	2×1 以上		3.6		1.8 等間		I 期	
SB 5223	東西	2×4	7.2	3.0	1.8 等間	1.5 等間		I 期	
SB 5224	南北?	2×2?	2.1 以上	1.8 以上	2.1	1.8		III 期	
SB 5225	東西	2×5	9.0	4.5	1.8 等間	2.25 等間		III-1 期	
SB 5226	東西	2×4	7.3	4.2	西から 1.8-1.8-1.8-1.95	2.1 等間		III-2 期	
SB 5227	東西	2×4	6.6	2.8	西から 1.5-1.5-1.8-1.8	1.4 等間		II 期	
SB 5228	東西	2×2 以上	2.4 以上	3.3	2.4	1.65 等間		I 期	
SB 5229	南北	2×3	5.4	3.0	1.8 等間	1.5 等間		II 期	
SB 5230	南北	2×3	5.8	3.6	北から 2.0-2.0-1.8	1.8 等間		I 期	
SB 5231	南北	1×3	3.9	3.3	北から 1.5-1.2-1.2	3.3		III 期	
SB 5232	南北	2×3	4.95	3.6			東 2.1	I 期	
SB 5233	東西	1	1.8		1.8			I 期	門
SB 5234	南北	2×5	10.8	4.2	北から 2.25-2.1-2.1-2.1-2.25	2.1 等間		I 期	
SB 5235	東西	2×3	4.95	3.6	1.65 等間	1.8 等間	南 2.25	III 期	
SB 5236	南北	1×3	4.35	3.0	北から 1.5-1.5-1.35	3.0		III 期	
SB 5237	東西	2×3	5.7	3.6	西から 2.1-1.8-1.8	1.8 等間	南 1.8	II 期	
SB 5238	南北	2×2?	3.6	1.5 以上	1.8 等間	1.5		III 期	
SB 5239	南北	2×4?						I 期	
SB 5240	東西	2×3?	5.4	1.8 以上	西から 1.8-1.5-2.1	1.8		II 期	
SB 5241	東西	2×3	5.4	3.0	1.8 等間	1.5 等間		III 期	
SB 5242	南北	2×3	5.4	3.0	1.8 等間	1.5 等間		I 期	
SB 5243	東西?	2×2 以上	3.3 以上	3.0	3.3	1.5 等間		III-1 期	
SB 5244	東西	2×2	3.6	2.6	1.8 等間	1.3 等間		III-2 期	総柱建物
SB 5245	南北	2×1 以上		3.6		1.8 等間		III 期	
SB 5246	南北	2×3?	5.4	2.0 以上	1.8 等間	2.0		I 期	
SA 5247	東西	4	6.0		1.5 等間			II 期	
SB 5248	南北	2×3	3.75	3.3	1.25 等間	1.65 等間		III-1 期	総柱建物
SB 5249	南北	2×3	4.2	3.6	北から 1.5-1.5-1.2	1.8 等間		III-2 期	
SB 5250	南北	2×3	5.4	3.6	1.8 等間	1.8 等間		III 期	
SB 5251	南北	2×5	8.1	4.2	北から 1.6-1.6-1.6-1.65-1.65	2.1 等間		III-1 期	
SB 5252	南北	2×3?	4.95	2.1 以上	1.65 等間	2.1		I 期	

五坪

表5 掘立柱建物・掘立柱列一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法(m)		廂の出	時期	備考	
		梁行×桁行	(m)	(m)	桁行	梁行				
五坪	SB 5253	東西	2×2以上	2.1以上	4.2	2.1	2.1等間		Ⅲ-2期	
	SB 5254	南北	2×2	3.30	3.0	1.65等間	1.5等間		Ⅰ期	総柱建物
	SB 5255	東西	2×2以上	2.1以上	3.6	2.1	1.8等間		Ⅲ期	
	SB 5256	南北	2×3	4.95	3.6	1.65等間	1.8等間		Ⅲ期	
	SB 5257	南北	2×2	3.3	3.0	1.65等間	1.5等間		Ⅰ期	総柱建物
	SB 5258	南北	2×2	4.2	4.0	2.1等間	2.0等間		Ⅲ-1期	
	SB 5259	東西	2×2以上	4.0以上	4.0	2.0等間	2.0等間		Ⅰ期	
	SB 5260	南北	2×2以上	2.1以上	3.6	2.1	1.8等間		Ⅲ-2期	
	SB 5261	東西	2×4	7.2	3.6	1.8等間	1.8等間		Ⅲ-2期	
	SB 5262	東西	2×4?	6.3		西から1.65-1.5-1.5-1.65			Ⅱ期	
	SB 5263	南北	2以上×3以上	3.9以上	1.8以上	南から2.1-1.8	1.8		Ⅲ期	
	SB 5264	東西	2×1以上		4.8		2.4等間		Ⅲ-2期	
	SB 5265	東西	1以上×1以上	2.4以上?		2.4			Ⅰ期	
	SB 5266	東西	2×3以上	3.6以上	4.5	1.8等間	2.25等間		Ⅲ-1期	
SA 5267	東西	2以上	2.25		2.25					
遺構番号	棟方向	規模(間)	桁行全長	梁行全長	柱間寸法(m)		廂の出	時期	備考	
		梁行×桁行	(m)	(m)	桁行	梁行				
六坪	SB 6201	南北	6×3?	10.5以上	6.0	1.8等間	2.0等間		Ⅲ期	総柱建物
	SB 6202	東西	2×5	9.55	4.2	1.95等間	2.1等間		Ⅱ期	
	SB 6203	東西	2×3	5.4	3.6	1.8等間	1.8等間		Ⅰ期	
	SA 6204	南北	3以上	6.6		南から2.4-2.1-2.1			Ⅰ期	
	SA 6205	東西	5	5.4		1.8等間			Ⅱ期	
	SB 6206	東西	2×3	4.95	3.6	1.65等間	1.8等間		Ⅰ期	
	SB 6207	東西	2×5	10.0	4.0	西から2.0-2.0-2.2-1.8-2.0	2.0等間	南 2.4	Ⅰ期	
	SB 6208	東西	2×5	9.55	4.8	1.95等間	2.4等間	南 3.0	Ⅱ期	
	SB 6209	南北	2×2	5.0	3.0	5	3		Ⅱ期	
	SB 6210	南北	2×4	9.0	3.6	2.25等間	1.8等間		Ⅰ期	
	SB 6211	東西	2×5以上	10.0以上	4.2	東から2.0-2.0-2.0-1.8-2.2-	2.1等間		Ⅲ-2期	
	SB 6212	東西	2×5以上	11.0以上	4.0	東から1.8-2.4-2.1-2.1-2.1-	2.0等間		Ⅲ-1期	
	SB 6213	南北	2×7	14.0	4.2	2.0等間	2.1等間		Ⅲ-1期	
	SB 6214	南北?	2以上×2以上	1.8以上		1.8			Ⅲ-2期	
	SB 6215	南北	2×3	5.3	3.6	北から1.65-2.0-1.65	1.8等間		Ⅲ-2期	
	SB 6216	東西	1×3?	5.4	2.7	1.8等間?	2.7		Ⅱ期	
	SB 6217	東西	2×5	9.0	7.5	1.8等間	2.25等間	南 3.0	Ⅰ期	
	SB 6218	東西	2×4	11.7	4.2	西から3.0-2.85-2.85-3.0	2.1等間	南 2.4	Ⅲ-1期	
	SB 6219	南北	2×5	8.55	3.6	北から1.8-1.8-1.65-1.65-1.65	1.8等間		Ⅱ期	
	SB 6220	南北	2×3	8.55	4.2	2.85等間	2.1等間		Ⅱ期	
	SB 6221	東西	2×4	10.0	4.2	2.5等間	2.1等間	北 3.3	Ⅲ-2期	西側1間目と東側1間目之間仕切り
	SA 6222	東西	2以上	4.2以上		2.1等間			Ⅰ期	
	SA 6223	東西	8以上	14.7以上		2.1等間			Ⅰ期	
SB 6224	東西	2×4	8.0	3.6	2.0等間	1.8等間		Ⅰ期		
SB 6225	南北	2×2	4.2	3.6	2.1等間	1.8等間		Ⅱ期	総柱建物	
SB 6226	南北	2×2以上						Ⅰ期		
SB 6227	東西	1	3.0		3.0				門	
SB 6228	東西	1	3.3		3.3			Ⅱ期	門	
SB 6229	東西	1	3.0		3.0			Ⅲ期	門	
SB 6230	東西	1	3.3		3.3			Ⅱ期	門	

表6 井戸一覧表

遺構番号	掘形等			井戸枠		時期	主な出土遺物	
	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)			
五 坪	SE5501	楕円形?	東西 1.8、南北 2.0?	2.1	方形横板組 (上段) 方形横板組 (下段)	一辺 1.0 一辺 0.9	Ⅲ期 土師器、須恵器、黒色土器、墨書土器、製塩土器、土馬、丸瓦、平瓦、鉄刀子、鉄釘、瓢箪、網代、桃種	
	SE5502	隅丸方形	一辺 1.25	1.2	方形縦板組横棧留	東西 0.6、 南北 0.7	Ⅲ期 土師器、須恵器、製塩土器、丸瓦、平瓦、鉄刀子、瓢箪、桃種	
	SE5503	楕円形	東西 1.8、南北 2.0?	0.8	井戸枠残存せず		Ⅰ期	
	SE5504	楕円形	東西 2.4、南北 2.1	0.55	方形縦板組横棧留	一辺 0.95	Ⅱ期 土師器、須恵器、墨書土器、製塩土器、丸瓦、曲物、斎串、桃種	
	SE5505	隅丸方形	東西 3.2、南北 3.5	2.2	方形縦板組隅柱横棧留	一辺 0.9	Ⅲ期 土師器、須恵器、黒色土器、墨書土器、ミニチュア土器 (甕)、製塩土器、土馬、軒丸瓦 1 点 (6629 種別不明)、丸瓦、平瓦、鉄刀子、ガラス玉、砥石、曲物、斎串、箸、横櫛、網代、桃種	
	SE5516	楕円形	東西 2.1、南北 2.0	0.9	井戸枠残存せず		Ⅲ期 土師器、須恵器、製塩土器	
	SE5507	隅丸方形	一辺 1.3	1.4	井戸枠残存せず		Ⅱ期 土師器、須恵器、墨書土器、製塩土器、土師器、須恵器、平瓦、砥石?	
	SE5508	円形	東西 3.0、南北 3.1	1.0	方形縦板組横棧留	径 1.0	Ⅰ期 土師器、須恵器、墨書土器、製塩土器、鉄釘、桃種	
	SE5509	隅丸方形	一辺 2.7	1.7	方形縦板組横棧留	一辺 0.85	Ⅲ期 土師器、須恵器、黒色土器、奈良三彩、墨書土器、ミニチュア土器 (壺)、製塩土器、平瓦、鉄釘、曲物、斎串、箸、桃種	
	SE5510	楕円形	東西 2.4、南北 2.5	2.0	井戸枠残存せず		Ⅱ・Ⅲ期 土師器、須恵器	
	SE5511	楕円形	東西 2.8、南北 2.6	2.0	方形縦板組隅柱横棧留	一辺 1.05	Ⅲ期 土師器、須恵器、墨書土器、製塩土器、軒平瓦 3 点 (6691A・6802B・新形式)、丸瓦、平瓦、鉄製釜?、鉄釘、砥石、曲物、斎串、桃種	
	SE5512	円形	東西 1.2、南北 1.3	1.1	方形縦板組 木櫃	東西 0.5、 南北 0.6 東西 0.4、 南北 0.55	Ⅰ期 土師器、須恵器、製塩土器、鉄釘、銅釘、曲物	
	SE5513	楕円形	東西 2.4、南北 2.5	3.1	井戸枠残存せず		Ⅲ期 土師器、須恵器、墨書土器、製塩土器、土馬、曲物、桃種	
	SE5514	隅丸方形	東西 1.6、南北 1.3	2.3	井戸枠残存せず		Ⅱ期 須恵器、銅製鞘金具	
	SE5515	円形?	東西 2.2 以上、南北 2.4	1.5	井戸枠残存せず		Ⅰ期 土師器、須恵器、墨書土器、製塩土器、平瓦、桃種	
	SE5516	楕円形	東西 1.4、南北 1.8	3.0	井戸枠残存せず		Ⅲ期 土師器、須恵器	
	SE5517	楕円形	東西 2.6、南北 2.5	1.7 以上	井戸枠残存せず		Ⅰ期 土師器、須恵器	
六 坪	SE6501	隅丸方形	東西 2.8、南北 2.4	1.5	方形縦板組横棧留	一辺 1.0	Ⅲ期 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、墨書土器、ミニチュア土器 (壺)、製塩土器、平瓦、刻印瓦、曲物、斎串、馬形、桃種	
	SE6502	隅丸方形	東西 1.4、南北 1.4	1.0	方形縦板組横棧留	一辺 0.7	Ⅰ・Ⅱ期 土師器、須恵器、製塩土器、曲物、瓢箪	
	SE6503	隅丸方形	東西 0.9 以上、南北 2.7	1.0 以上	方形横板組	南北 0.75	Ⅲ期 土師器、須恵器、製塩土器、丸瓦、平瓦	



図 57 第 3 区全景 (西から)



図 58 遺構平面図 1 (1/250)

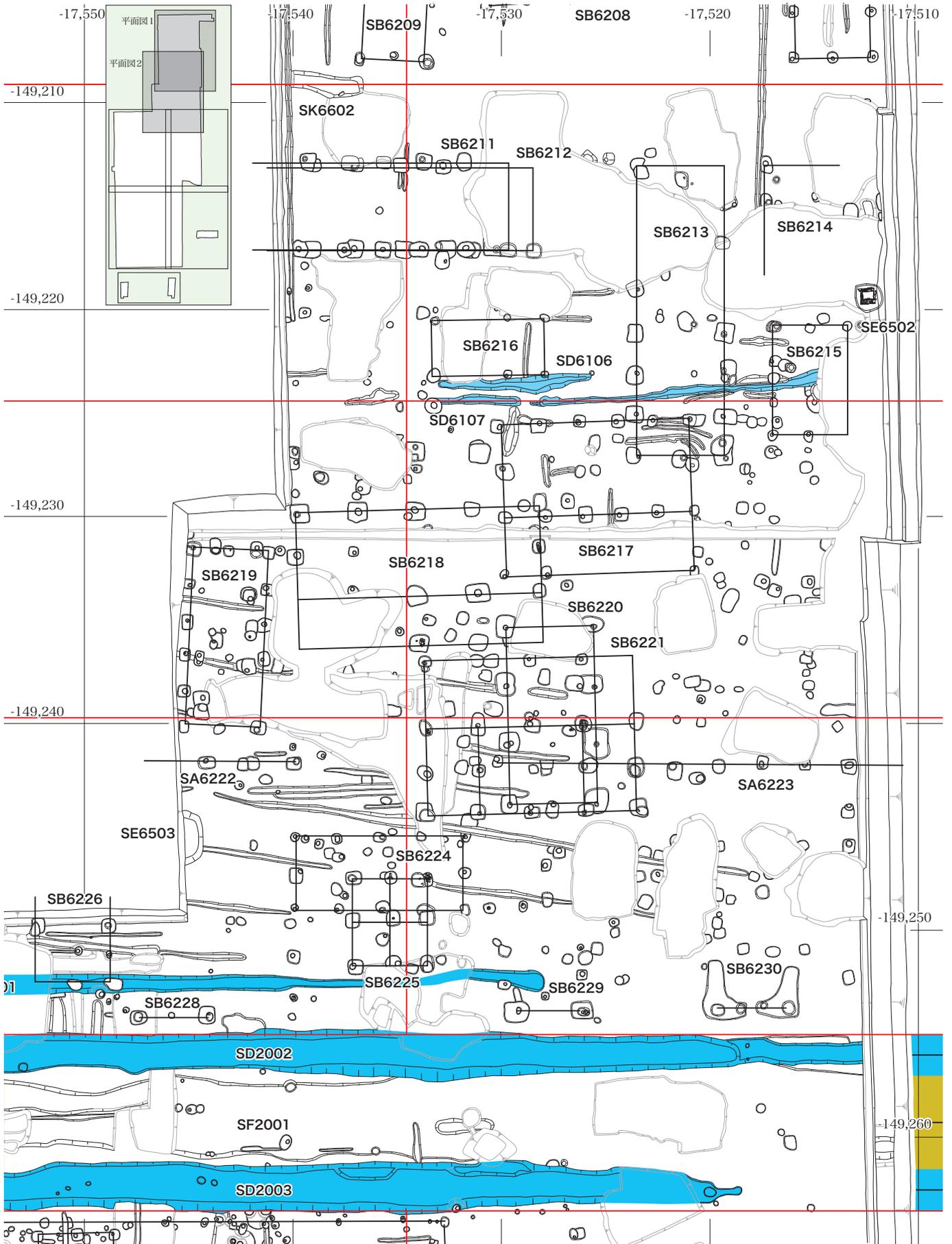


图 59 遺構平面图 2 (1/250)

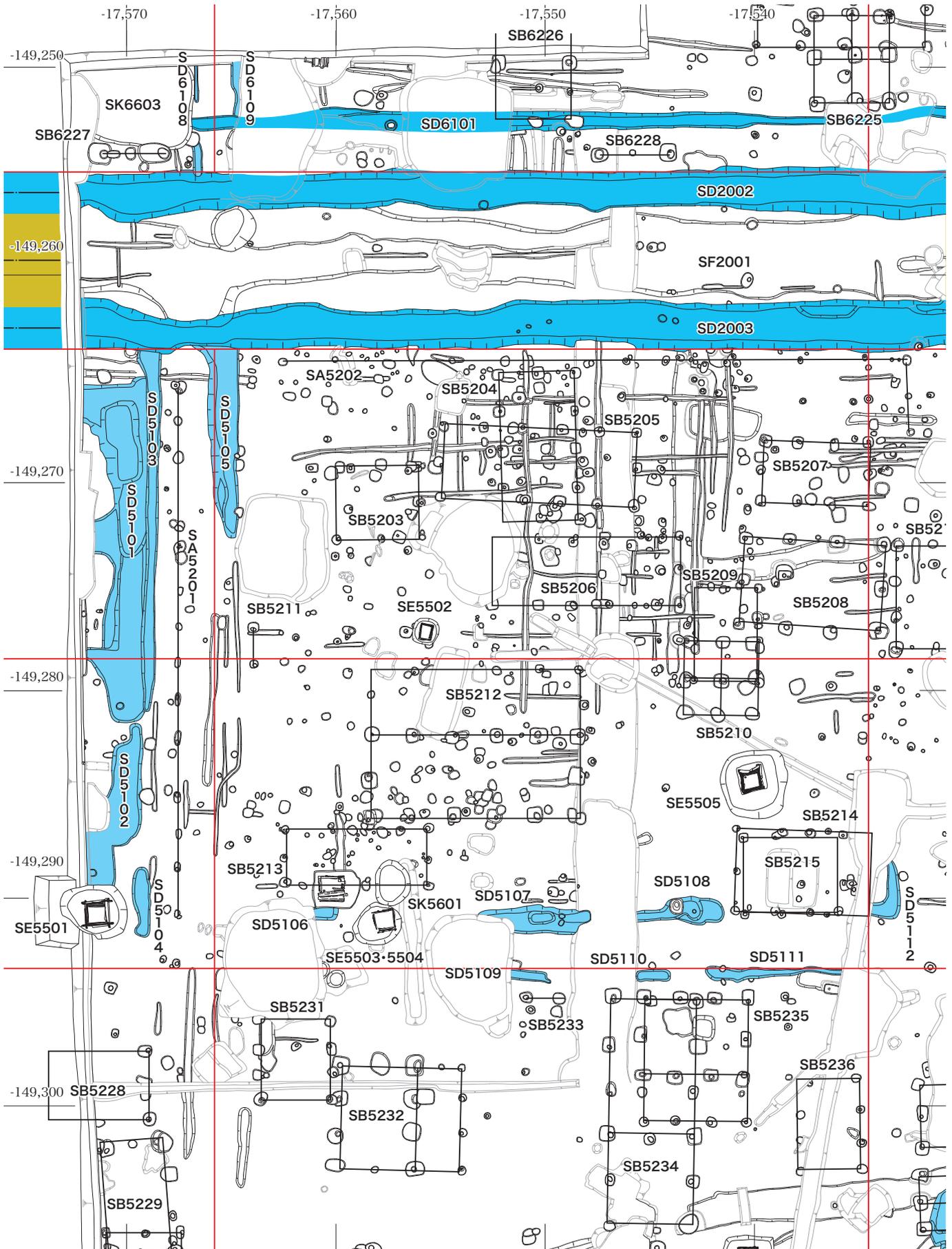


图 60 遺構平面図3 (1/250)

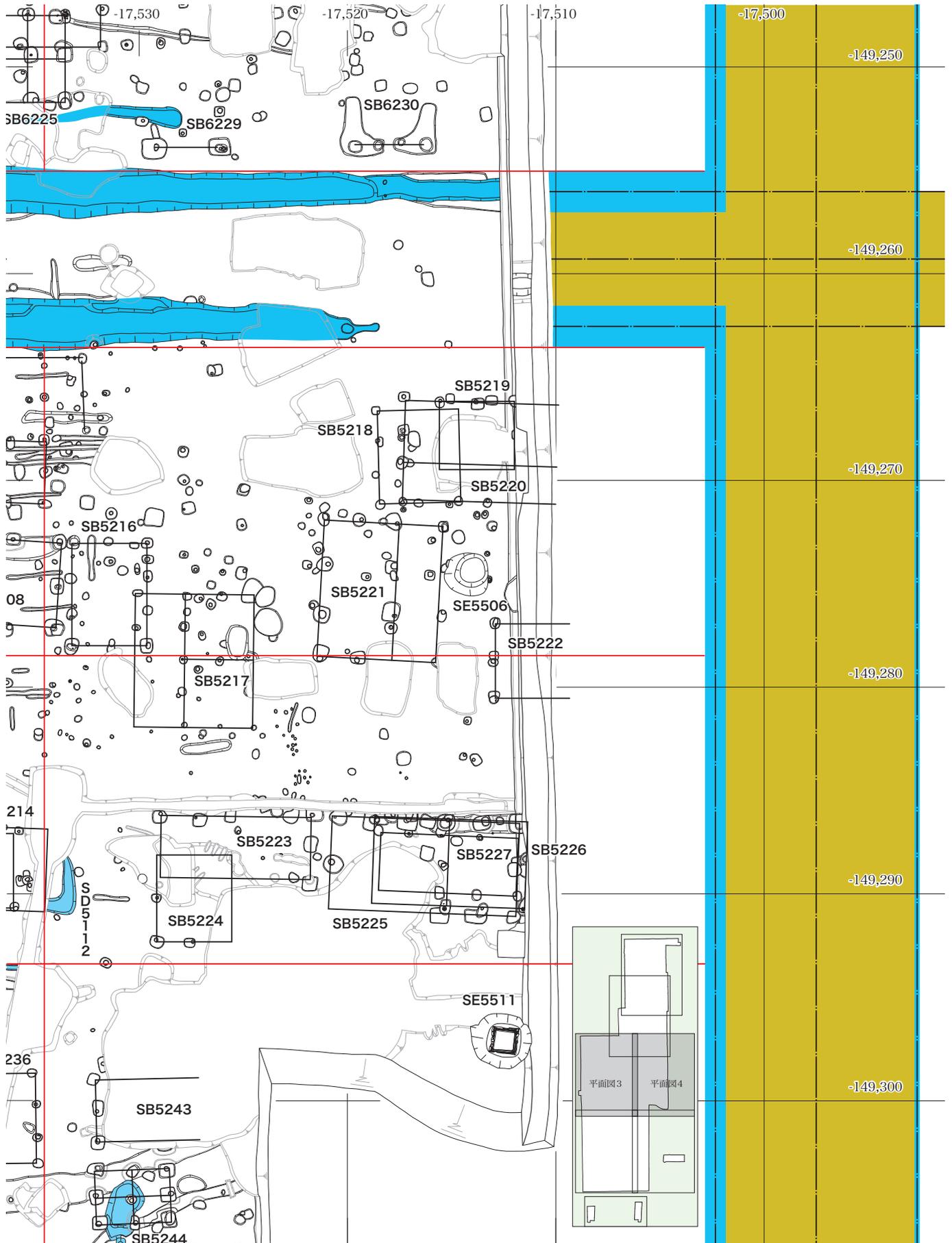


图 61 遺構平面図 4 (1/250)

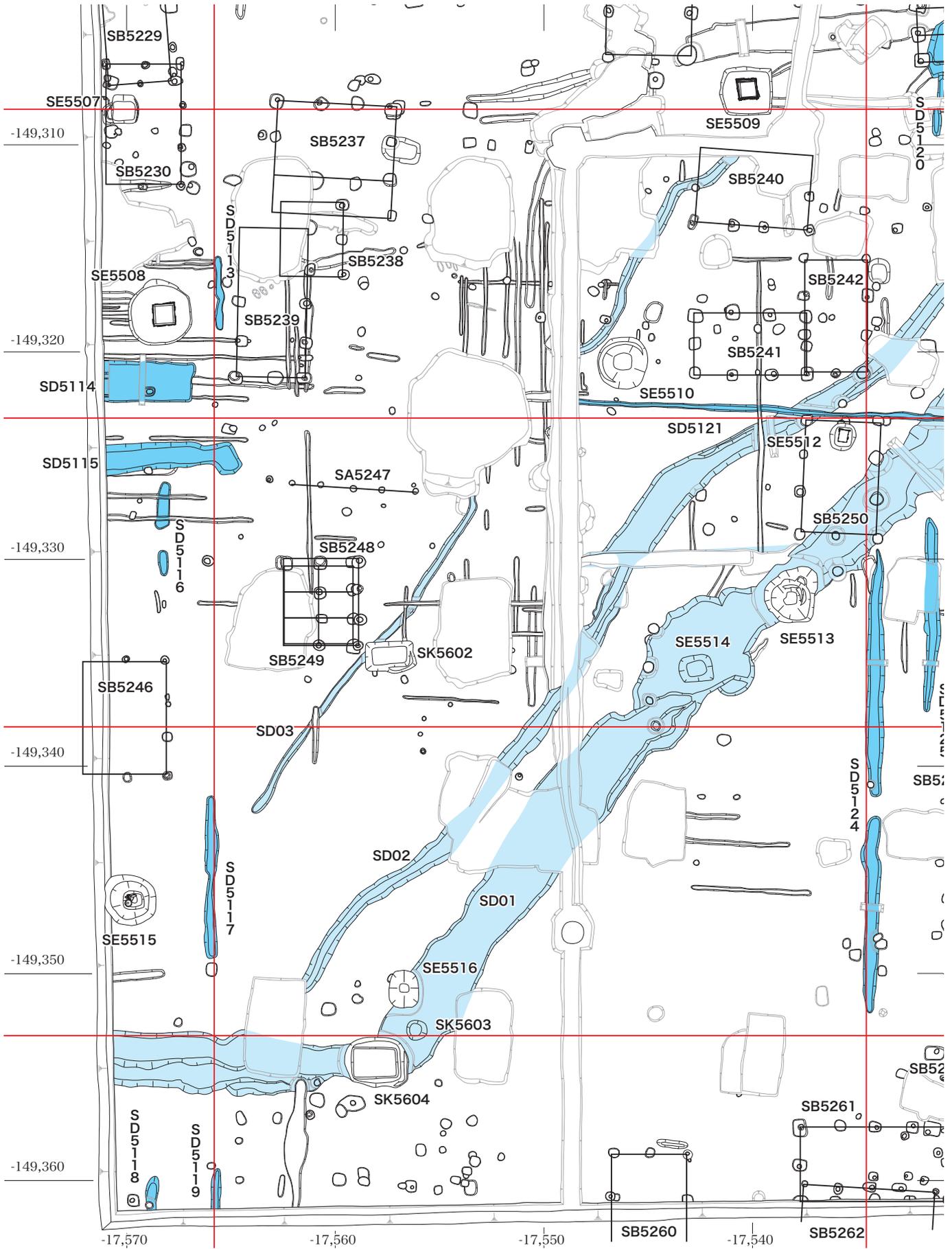


図 62 遺構平面図 5 (1/250)

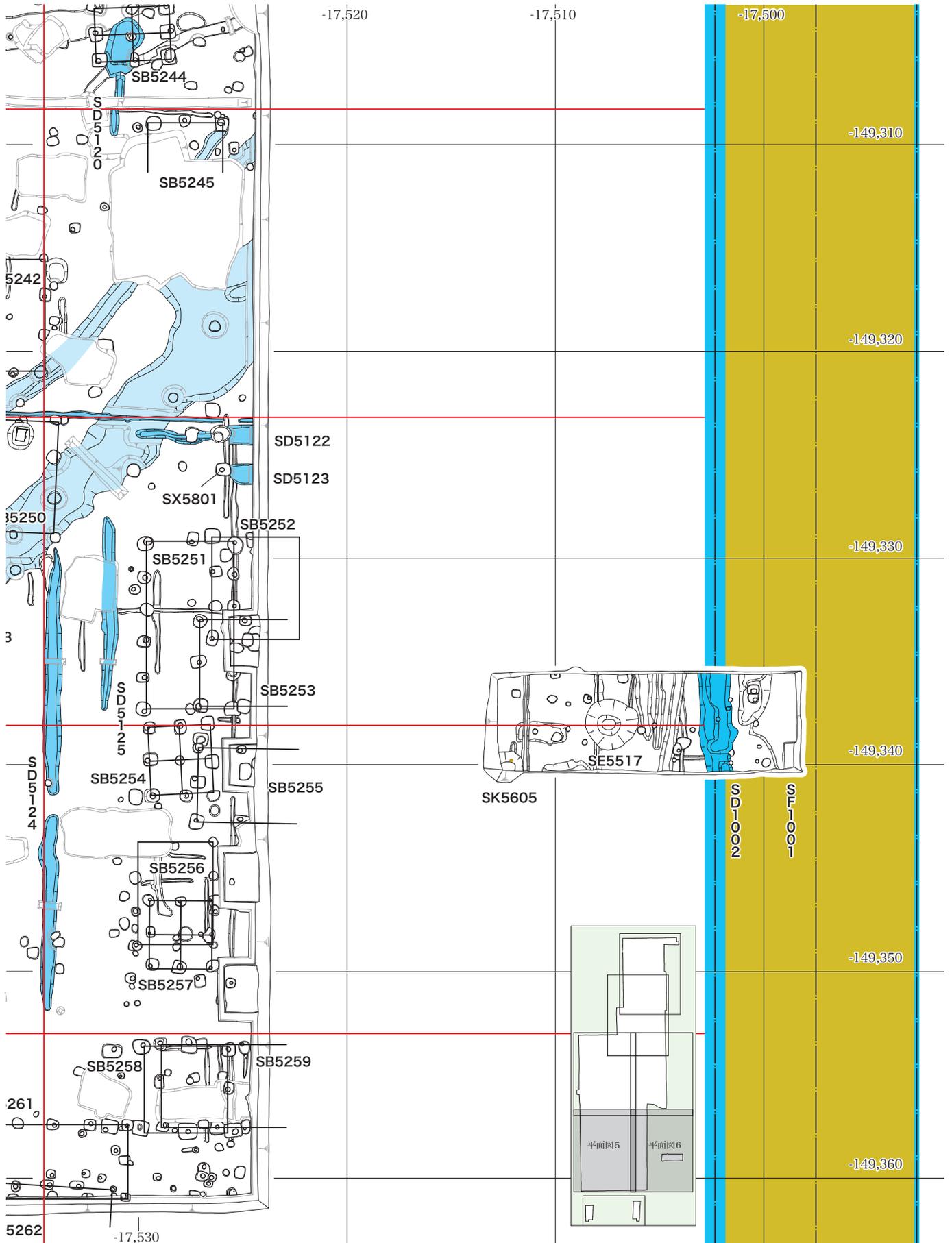


图 63 遺構平面図 6 (1/250)

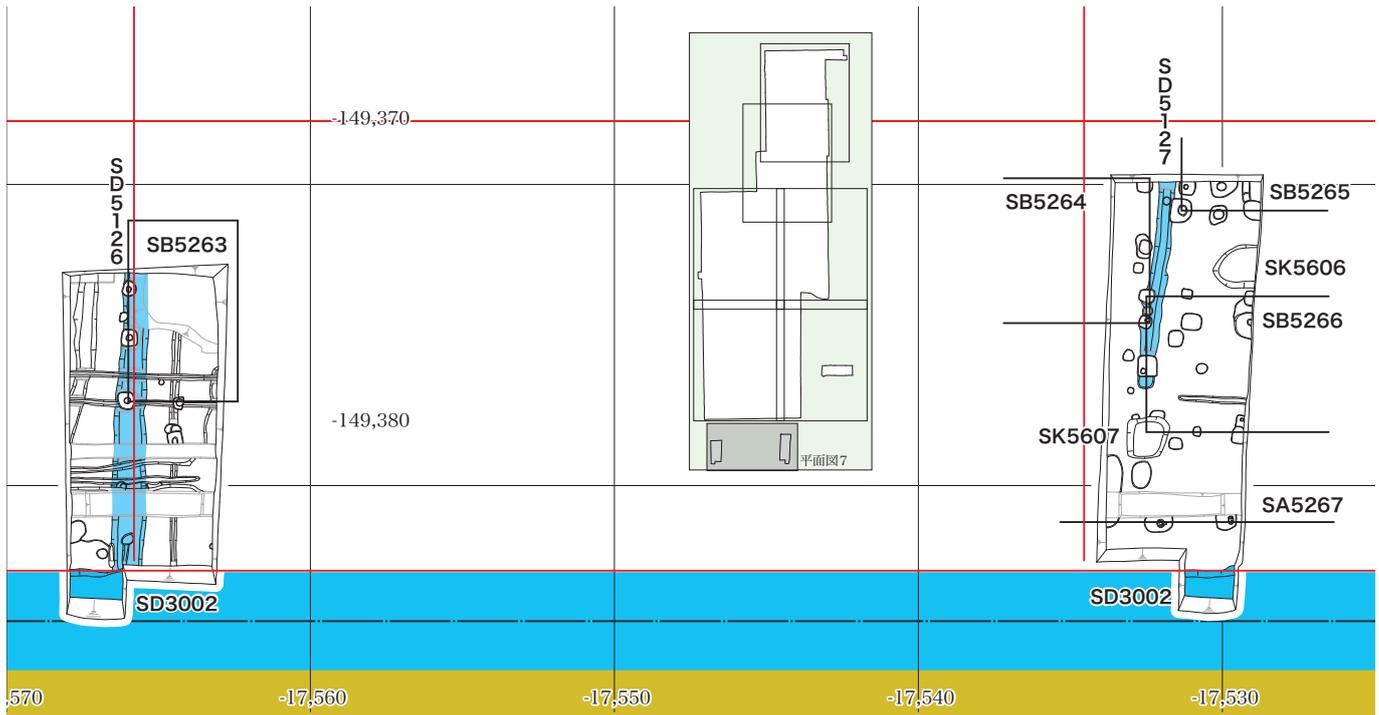


図 64 遺構平面図 7 (1/250)



図 65 九条条間路南側溝 SD2003 出土土馬

平城京左京九条三坊五・六坪 発掘調査概要報告

印刷 令和 3 (2021) 年 2 月
発行 令和 3 (2021) 年 2 月
編集 奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135 奈良市大安寺西二丁目 2 8 1 番地
TEL 0742-33-1821
URL <http://www.city.nara.nara.jp/>
E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp
発行 奈良市教育委員会
630-8580 奈良市二条大路南一丁目 1-1
TEL 0742-34-1111 (代)
印刷 株式会社 JITSUGYO
630-8144 奈良市東九条町 6-6

